榛原町内遺跡発掘調査概要報告書　1997年度

榛原町文化財調査概要　20

1999

榛原町教育委員会

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書　1997年度

榛原町文化財調査概要　20

1999

榛 原 町 教 育 委 員 会

例　　言

1　本書は、奈良県宇陀郡榛原町内に所在する「榛原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（榛原町文化財調査概要20）である。

2　調査は、平成９年度（1997年度）国庫補助事業・県費補助事業として榛原町教育委員会が実施し、平成９年６月16日に着手し、平成10年３月31日に終了した。

3　現地調査は、奈良県教育委員会の指導のもと榛原町教育委員会生涯学習課技師　柳澤一宏が担当した。

4　調査組織および関係者は、「Ⅰ　埋蔵文化財発掘調査の概要」に掲載している。

5　方位は、基本的には、座標北を指している。

6　土層及び土器の色調は、『新版　標準土色帖』1987年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。

7　各遺跡の調査記録、遺物等は榛原町教育委員会において保管している。

8　本書の執筆は、柳澤、一部を横澤慈が担当し、編集は柳澤が行った。

目　　次

Ⅰ　埋蔵文化財の概要 …… 1

1　埋蔵文化財発掘調査等の概要

2　調査組織等

Ⅱ　位置と環境 …… 6

1　地理的環境

2　歴史的環境

Ⅲ　沢遺跡第7次発掘調査概要 …… 8

1　調査の契機と経過

2　位置と環境

3　遺跡の調査

4　まとめ

5　抄　録

Ⅳ　沢遺跡第8次発掘調査概要 …… 24

1　調査の契機と経過

2　位置と環境

3　遺跡の調査

4　まとめ

5　抄　録

Ⅴ　下城・馬場遺跡第4次発掘調査概要 …… 35

1　調査の契機と経過

2　位置と環境

3　遺跡の調査

4　まとめ

5　抄　録

報　告　書　抄　録

Ⅰ　埋蔵文化財発掘調査の概要

1　埋蔵文化財発掘調査等の概要

榛原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為にともなう埋蔵文化財の発掘調査が本格的に行われている。毎年、町内各所で多くの開発行為が計画されており、埋蔵文化財の取り扱い等については、事業者等とその都度、協議を重ねているところである。1997年度（平成９年度）に榛原町教育委員会が取り扱った遺跡有無確認踏査願、埋蔵文化財発掘届・通知、発掘調査等は表１のとおりである。また、1997年度（平成９年度）に実施した発掘調査等は表２・図１のとおりである。なお、本書には国庫補助事業・県費補助事業として実施した沢遺跡（７次調査・８次調査）、下城・馬場遺跡（４次調査）の発掘調査概要を収録している。

表１　1997年度（平成９年度）発掘届・発掘調査件数等一覧表

遺跡有無確認踏査願	埋蔵文化財発掘届	埋蔵文化財発掘通知	埋蔵文化財発掘届・通知 合計	発掘調査（榛原町担当）	立会調査（榛原町担当）	測量調査（榛原町担当）	調査件数合計
4	4	5	9	5	4	0	9

種別＼摘要	遺跡名	所在地	調査原因	原因者	工事面積	措置等
遺跡有無確認踏査願		榛原町福地	道路建設工事	奈良県（大字発土木事務所）	6,500㎡	奈良県立橿原考古学研究所踏査遺構・遺物なし
	坊ノ浦遺跡	榛原町桧牧	ほ場整備工事	榛原町（産業課）	59,000㎡	遺物散布地、発掘通知提出
		榛原町赤埴甲	ため池新設工事	榛原町（産業課）	2,600㎡	遺構・遺物なし
		榛原町内牧	林道開設工事	榛原町（産業課）	2,000㎡	遺構・遺物なし
埋蔵文化財発掘届・通知	上井足北出遺跡	榛原町萩原	個人住宅建設工事	室　輝雄	889㎡	立会調査
	丹切遺跡	榛原町上井足	個人住宅建設工事	冀　壷文	164㎡	立会調査
	額井南遺跡	榛原町額井	道路拡幅工事	榛原町（土地改良課）	2,000㎡	発掘調査
	谷遺跡	榛原町上井足	個人住宅建設工事	穴瀬芳廣	165㎡	立会調査
	桧牧市場西垣内遺跡	榛原町桧牧	ほ場整備工事	榛原町（産業課）	163㎡	立会調査
	坊ノ浦遺跡	榛原町桧牧	農地形状変更工事	戎井　修	1,517㎡	立会調査
	坊ノ浦遺跡	榛原町桧牧・白明	ほ場整備工事	榛原町（産業課）	48,000㎡	発掘調査（平成10年度）
		榛原町内牧	道路拡幅工事	榛原町（産業課）	13,000㎡	
	椿尾遺跡	榛原町高井	道路拡幅工事	榛原町（産業課）	8,000㎡	

表2　1997（平成9）年度発掘調査等一覧表

番号	調査種別	榛原町遺跡地図番号・奈良県遺跡地図番号	遺跡名	調査地	現地調査期間	調査原因（原因者）	調査面積（㎡）	調査概要		遺跡概要	備考
								遺構	遺物		
1	発掘調査	1－85 1－86 ・ （未登載）	井之谷遺跡群（井之谷1号墳・2号地点）	榛原町下井足 1596-1 1709-1	1997・4・1～ 1997・5・28	土地区画整理工事（榛原井之谷特定土地区画整理組合）	1091	円墳（土壇2）、ピット6、中世墓4	縄文土器、石鏃、須恵器、土師器、瓦器、陶器、銭貨、叩石？	弥生時代～中世の遺物散布地、古墳時代～飛鳥時代の古墳群、中世墓	
2	発掘調査	1－5 ・ （未登載）	額井南遺跡（2次調査）	榛原町額井 438-1,438-2 443、456-1	1997・11・11～ 1998・1・14	町道拡幅工事（榛原町）	62	土坑	サヌカイト剥片、土師器、瓦器、陶器、磁器、鉄釘、軍人土製品	縄文時代～中世の遺物散布地	
3	発掘調査	2－544 ・ 15－D－84	沢遺跡（7次調査）	榛原町沢 1417	1997・11・18～ 1998・3・10	個人住宅建設工事（砥出芳廣）	68	土坑、溝	縄文土器、サヌカイト剥片、土師器、陶器、磁器、鉄刀？、鉄釘、火打鎌？、小柄	縄文時代～中世の遺物 散布地・集落跡	本書所収
4	発掘調査	2－544 ・ 15－D－84	沢遺跡（8次調査）	榛原町沢 980	1997・12・9～ 1998・3・10	農地地盤改良工事（森岡茂雄）	43	溝、土坑、自然地形	縄文土器、石鏃、サヌカイト剥片、弥生土器、須恵器、円筒埴輪、瓦器、土師器、土錘、陶器、磁器、鉄釘、庖丁	縄文時代～中世の遺物 散布地・集落跡	本書所収
5	発掘調査	2－546 ・ 15－D－90	下城・馬場遺跡（4次調査）	榛原町沢 1292	1997・11・27～ 1998・3・31	農地地盤改良工事（田中　昇）	105	礎石建物跡、土坑、ピット、溝	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、塼土、銭貨、鉄釘、鉄刀子ほか	縄文時代～古墳時代・中世の遺物散布地 中世の居館跡	本書所収
6	立会調査	1－98 ・ 15－B－8	丹切遺跡	榛原町萩原 元萩原 1614	1997・6・24	個人住宅建設工事（巽　憲文）		なし	なし	縄文時代～中世の遺物散布地	
7	立会調査	2－180 ・ （未登載）	上井足北出遺跡	榛原町上井足 1105、1106	1997・7・7	個人住宅建設工事（室　輝雄）		なし	なし	縄文時代～古墳時代・平安時代～室町時代の遺物散布地・集落跡	
8	立会調査	2－86 ・ 15－B－132	谷遺跡	榛原町上井足 1801	1998・2・16	個人住宅建設工事（穴瀬芳廣）		なし	なし	弥生時代～古墳時代・中世の遺物散布地・集落跡	
9	立会調査	4－3 ・ 103－51	坊ノ浦遺跡	榛原町桧牧 1086-1	1998・3・16～ 1998・3・31	農地形状変更工事（戎井　修）		土坑、溝、ピット	縄文土器、サヌカイト剥片、須恵器、土師器ほか	縄文時代・古墳時代～中世の遺物散布地	

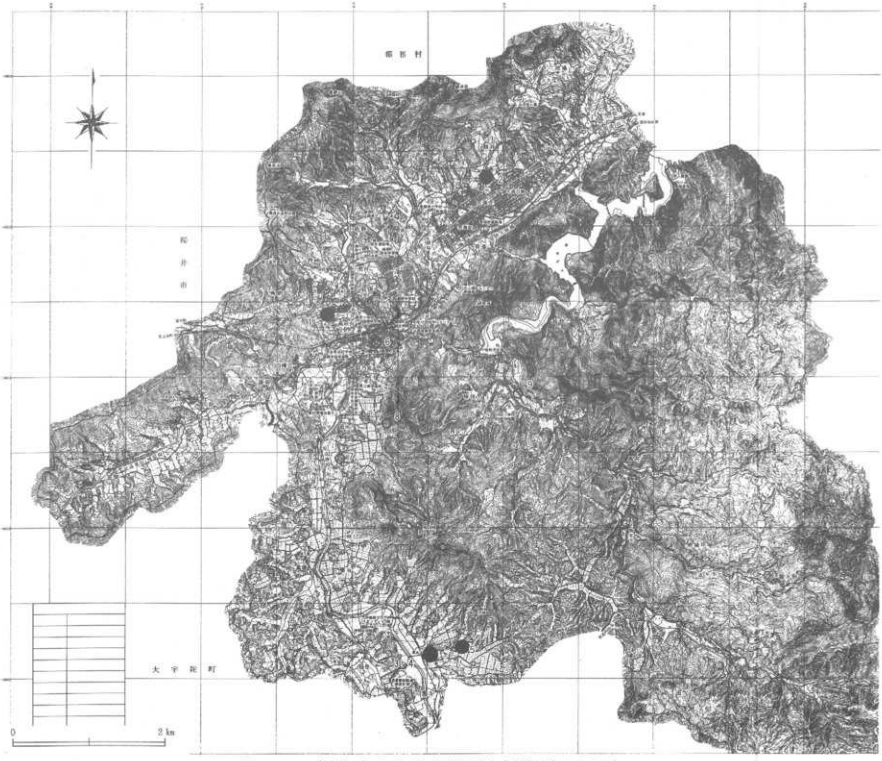


図1　1997（平成９）年度調査遺跡位置図（番号は表２と同じ）

2 調 査 組 織 等

現地調査及び整理作業等の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

1997年度（平成９年度）

総括	教 育 長	田村義治
庶務	事務局長	栗野雅治
	教育次長	福井三男（生涯学習課長事務取扱）
	生涯学習課	
	主 幹	藤田ユミ子
	課長補佐	林 宏典
調査	技 師	柳澤一宏
	補助員	井上好美、南信子、奥野信子
	作業員	太田政信、中尾一三、橿原栄子、橿原美智子、砥出愛子、横山寿舎、森岡茂雄、猪原隆雄、大門静、池田圭子、高野アサ子、中谷喜代子
	業務委託	日本テクノ㈱
指導		奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所
協力		砥出芳廣、森岡茂雄、田中昇
助言		白石太一郎、千田嘉博、辻本宗久

1998年度（平成10年度）

総括	教 育 長	田村義治
庶務	事務局長	栗野雅治
	教育次長	福井三男（生涯学習課長事務取扱）
	生涯学習課	
	主 幹	藤田ユミ子（～1998年10月）
	課長補佐	林 宏典 （～1998年12月）
		安達宗弘 （1998年12月～）
		打越明美 （1998年12月～）
整理	技 師	柳澤一宏
	補助員	井上好美、永野仁、横澤慈、坂佳彦、井上雅善
指導		奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所
協力		佐藤右文（遺物写真撮影）
助言		辻本宗久

Ⅱ 位 置 と 環 境

1 地 理 的 環 境

奈良盆地の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では大宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曽爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300～400ｍの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも総称され、大宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原町を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

図２　榛原町位置図

榛原町の四周は概ね標高約400～800ｍの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とをわける額井岳、香酔山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀的、東半は奥宇陀的な様相を呈している。

2 歴 史 的 環 境

宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献にも度々登場し、軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では３点の有舌尖頭器が出土しており、うち、２点が町内から出土していることが明らかとなっている。これらは、旧石器時代末期から縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峠遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。この頃の集落としては、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、谷遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や竪穴式住居跡などが確認されている遺跡もある。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山１号墳、シメン坂１号墳、前山１号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。５世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。６世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峠古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した将軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には宇陀においても荘園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、沢城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、谷畑中世墓地、大王山遺跡、能峠遺跡群、八咫烏遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

（参考文献等省略）

Ⅲ　沢遺跡第７次発掘調査概要

１　調査の契機と経過

沢遺跡は奈良県宇陀郡榛原町大字沢に位置し、現状は大半が畑地、一部が宅地や道路となっている。この遺跡は1955年（昭和30年）の沢集落内の町道拡幅工事に伴って多くの遺物が出土したことによってその存在が知られるようになり、その後、1963年（昭和38年）に第１次調査、1987年に第２次調査が行われている。榛原町教育委員会では、1991年（平成３年）以降、発掘調査を実施している。

遺跡南側の標高約333.4ｍの畑地等において、個人住宅建設工事が計画され、これに伴う発掘調査（第７次調査）を実施することとなった。現地調査は1997（平成９）年11月18日から1998（平成10）年３月10日にかけて実施した。なお、今回の調査地は、第５次調査地の南東にあたる（図４）。

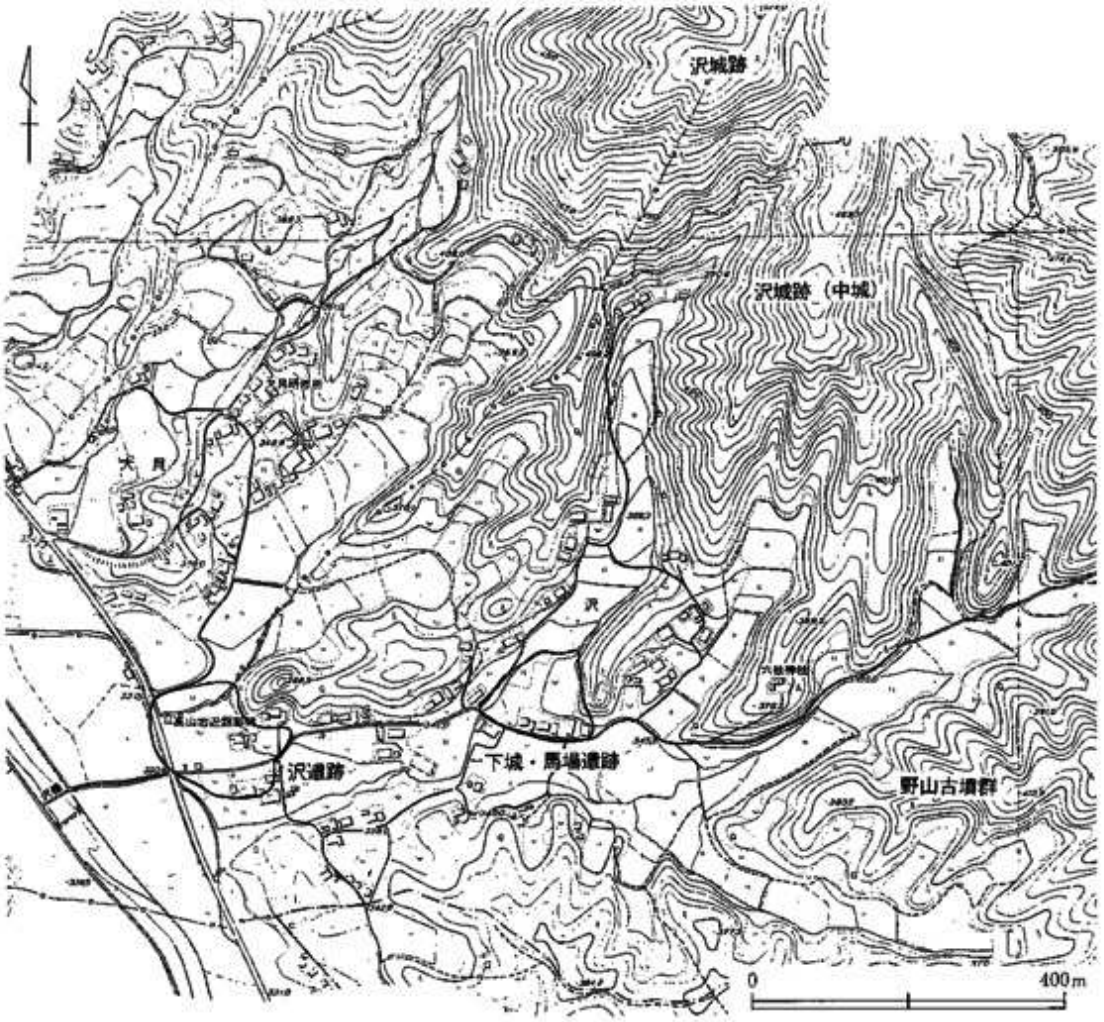


図３　沢遺跡位置図

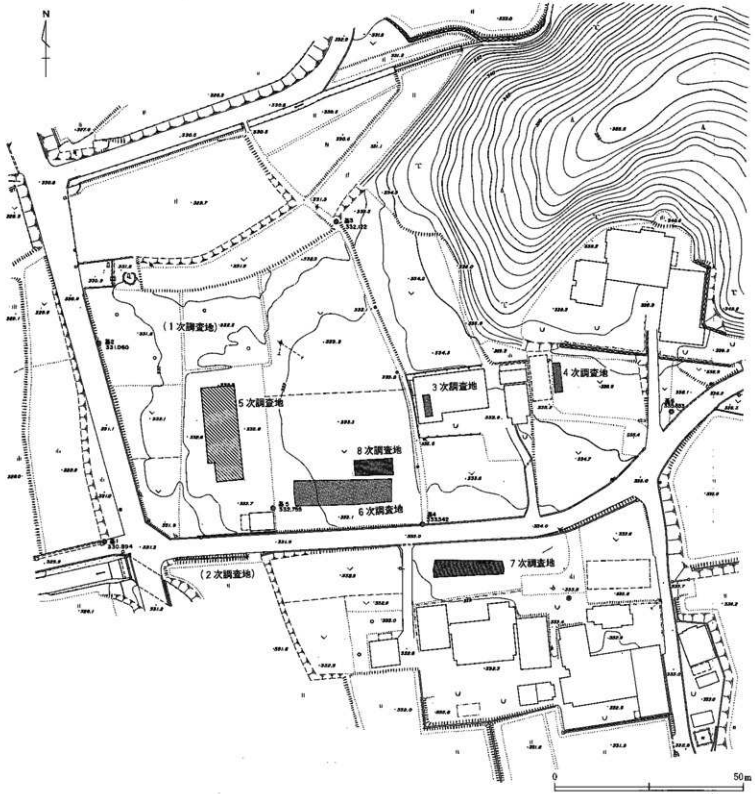
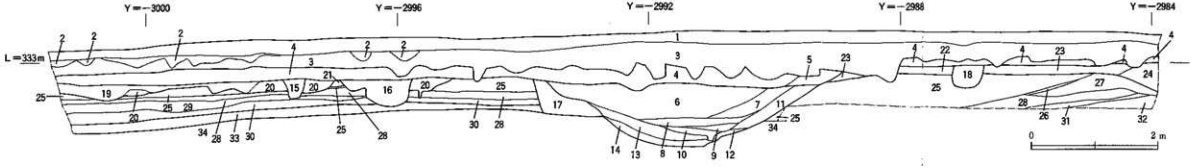

N
(1次調査地)
2次調査地
3次調査地
4次調査地
5次調査地
6次調査地
7次調査地
8次調査地
(2次調査地)
0
50m

図4　沢遺跡調査位置図



1	暗褐色土	〈10YR 3/3〉	第1層	19	褐色土 〈10YR 4/4〉
2	暗褐色土	〈10YR 3/3〉・褐色土 〈7.5YR 4/4〉		20	褐色粗砂 〈10YR 4/4〉
3	暗褐色土	〈10YR 3/4〉		21	褐色土 〈10YR 4/4〉
4	褐色土	〈10YR 4/4〉	第2層	22	灰黄褐色土(やや粘質) 〈10YR 4/2〉
5	にぶい黄褐色砂	〈10YR 4/3〉		23	にぶい黄褐色砂質土 〈10YR 5/3〉
6	暗褐色土	〈10YR 3/4〉	SD－01	24	褐色砂 〈10YR 4/4〉
7	にぶい黄褐色土	〈10YR 4/3〉		25	にぶい褐色土(やや砂質) 〈10YR 4/3〉
8	にぶい黄褐色土	〈10YR 4/3〉・第4層ブロック土含む		26	黒褐色土(やや砂質) 〈10YR 3/2〉
9	黒褐色粘質土	〈10YR 4/3〉		27	褐色砂 〈10YR 4/4〉
10	黄灰色粘土	〈2.5Y 4/1〉		28	灰黄褐色粘質土 〈10YR 4/2〉
11	にぶい黄褐色土(粘)	〈10YR 4/3〉		29	にぶい黄褐色砂質土 〈10YR 4/3〉
12	暗灰黄色粘質土	〈2.5Y 4/2〉		30	オリーブ褐色土 〈2.5Y 4/3〉
13	にぶい黄褐色粘質土	〈10YR 4/3〉		31	暗灰黄色土 〈2.5Y 4/2〉
14	黄灰色粘土	〈10YR 4/3〉		32	黒褐色粘質土 〈2.5Y 3/1〉
15	褐色土(やや砂質)	〈10YR 4/4〉	SK－11	33	黒褐色粘質土 〈10YR 3/2〉
16	にぶい黄褐色土	〈10YR 4/3〉・第4層ブロック土含む	SK－09	34	オリーブ褐色土(粘質) 〈2.5Y 4/3〉
17	にぶい黄褐色土	〈10YR 4/3〉・第4層ブロック土含む	SK－10		
18	にぶい黄褐色土	〈10YR 4/3〉	SK－08		

第3層
第4層
第5層
第6層

図5　沢遺跡（7次）土層断面図

2 位置と環境

沢遺跡は、芳野川東岸の標高331.5～335.5ｍの台地状の畑地に位置し、現在の芳野川からは約150～300ｍの距離をはかる。遺跡の北方、南方、西方の三方は芳野川に灌ぐ小支流である谷川や芳野川の氾濫原となっている。地形および遺物の散布状況から遺跡の範囲を推察すれば、氾濫原より約

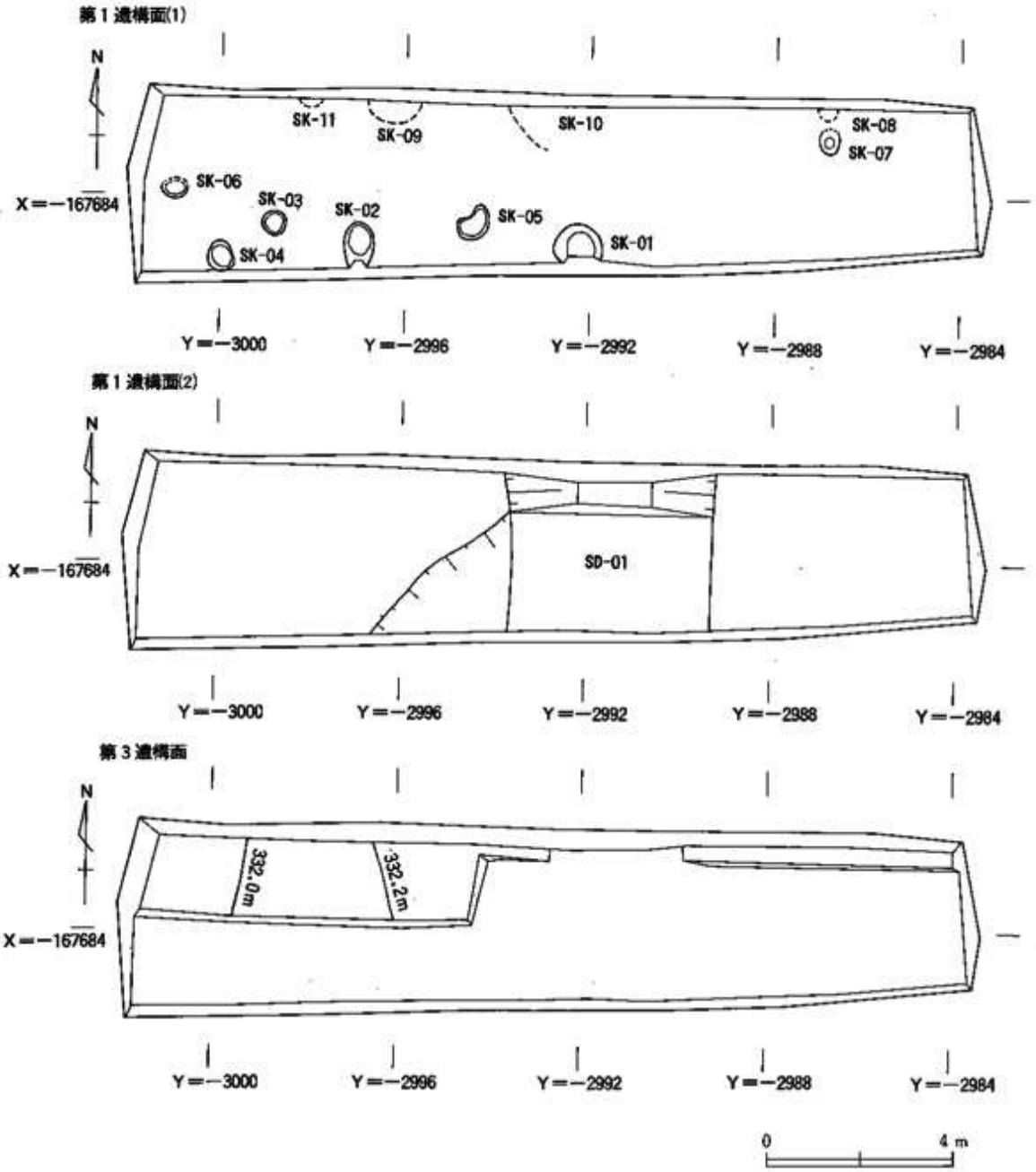


図6　沢遺跡（7次）遺構平面図

1～2m高くなっている畑地が中心となってくる。遺跡の東方には沢城跡から南西にのびる丘陵先端部がひかえ、この山裾までが遺跡の範囲と考えられる（図3）。

沢の谷川を挟んで南約200mの尾根上には弥生時代後期の住居跡や古墳時代中期末～後期初頭の古墳、中世の建物遺構（寺院跡？）などが確認されている延命寺遺跡、約400m東方には縄文晩期～弥生時代前期・中世の遺物が出土している下城・馬場遺跡、さらに東方には古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が確認されている。

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

今回の調査地対象地は、遺跡の南端部分に近いと推定している畑地で、そのほぼ中央部分に東西方向のトレンチ（長さ約19m、幅約4.5m～3m）を設定した（図4）。

西半部分での基本土層は第1層が耕作土、第2層がやや砂質の褐色土（床土）、第3層が褐色土・褐色粗砂、第4層がにぶい黄褐色土・灰黄褐色粘質土・にぶい黄褐色砂質土・オリーブ褐色土、第5層が黒褐色粘質土、第6層がオリーブ褐色土となっている（図5）。

(2) 検出遺構

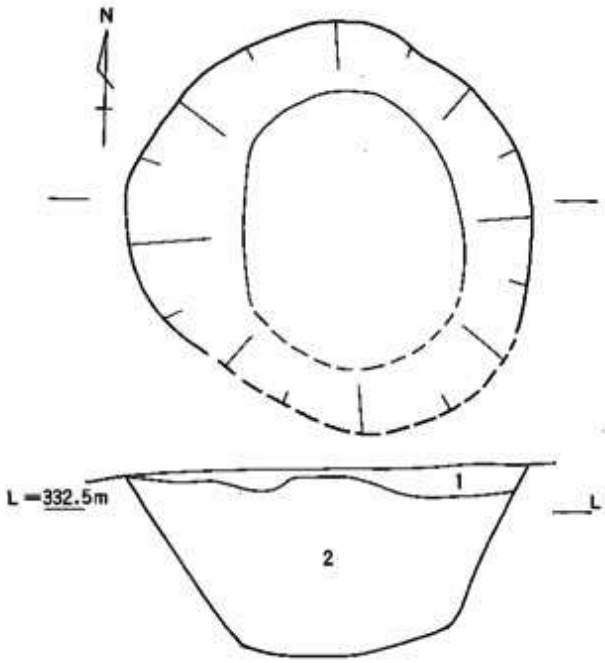
遺構面は2時期のものが認められ、第1遺構面（中世以降）は、若干の遺構重複があるものの土坑、溝を検出している。溝（SD－01）が埋没後、土坑（SK－01）が穿たれている（図6～8）。

従来の調査で検出している第2遺構面（弥生時代）の詳細は明らかにできない。第3遺構面（縄文時代後期）は、東から西へと緩やかに傾斜しているが、調査面積との関係上、明確な遺構を確認していない。第1遺構面で検出した遺構は、表3のとおりである。

表3 沢遺跡（7次）検出遺構一覧表

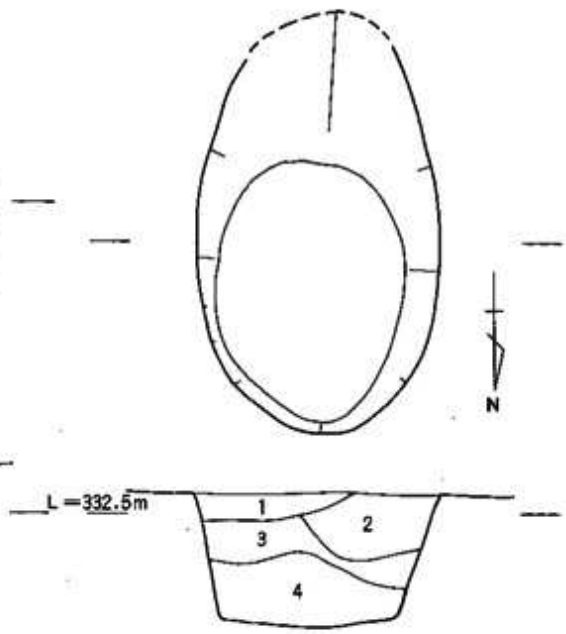
遺構名	平面形態	規模（cm）（長径×短径×深さ）（ ）＝現存規模	出土遺物	埋土	備考
SD－01		幅450×深さ100	縄文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器ほか	褐色砂質土ほか	溝
SK－01	円形	105 × 95 × 51	土師器、磁器	褐色砂質土ほか	
SK－02	楕円形	(95) × 60 × 35	土師器、磁器	褐色土ほか	
SK－03	円形	55 × 50 × 42	磁器	褐色砂質土ほか	
SK－04	円形	65 × 55 × 42	磁器	にぶい黄褐色土ほか	
SK－05	楕円形	80 × 50 × 10	陶器	暗褐色砂質土	
SK－06	円形	56 × － × 21	土師器、磁器	にぶい黄褐色土	
SK－07	円形	(50) × 45 × 16		にぶい黄褐色土	
SK－08	円形？	(50) × － × 35		オリーブ褐色土	土層断面で検出
SK－09	円形？	(115) × － × 45		にぶい黄褐色土	土層断面で検出
SK－10	円形？	－ × － × 55		にぶい黄褐色土	土層断面で検出
SK－11	円形？	－ × － × 32		褐色土	土層断面で検出

SK－01



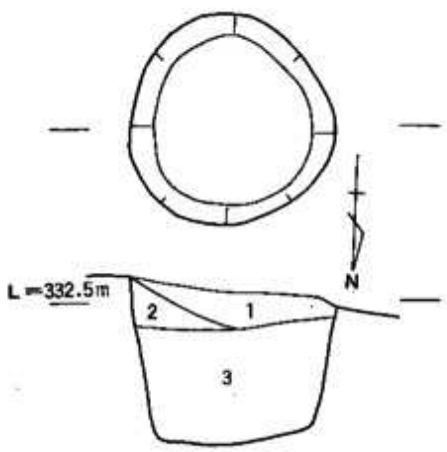
1 褐色粘質土 (10YR 4/6)
2 褐色砂質土 (10YR 4/4)

SK－02



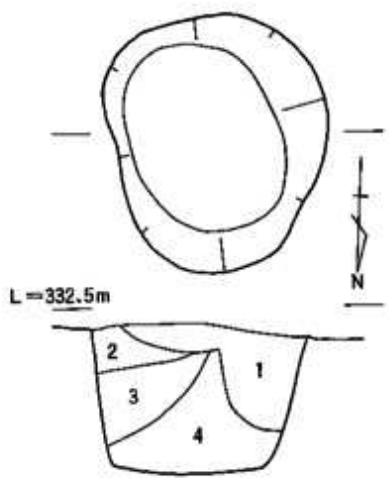
1 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
2 褐　色　土 (10YR 4/4) 灰黄褐色粘土含む
3 褐　色　土 (10YR 4/4)
4 暗灰黄色土 (2.5YR 4/2) 黒褐色土含む

SK－03



1 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
2 褐　色　土 (10YR 4/4) 灰黄褐色粘土含む
3 褐色砂質土 (10YR 4/4)

SK－04



1 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
2 褐　色　土 (10YR 4/4) 灰黄褐色粘土含む
3 褐　色　土 (10YR 4/4)
4 褐色粘質土 (10YR 4/6)

図7　沢遺跡（7次）土坑実測図(1)

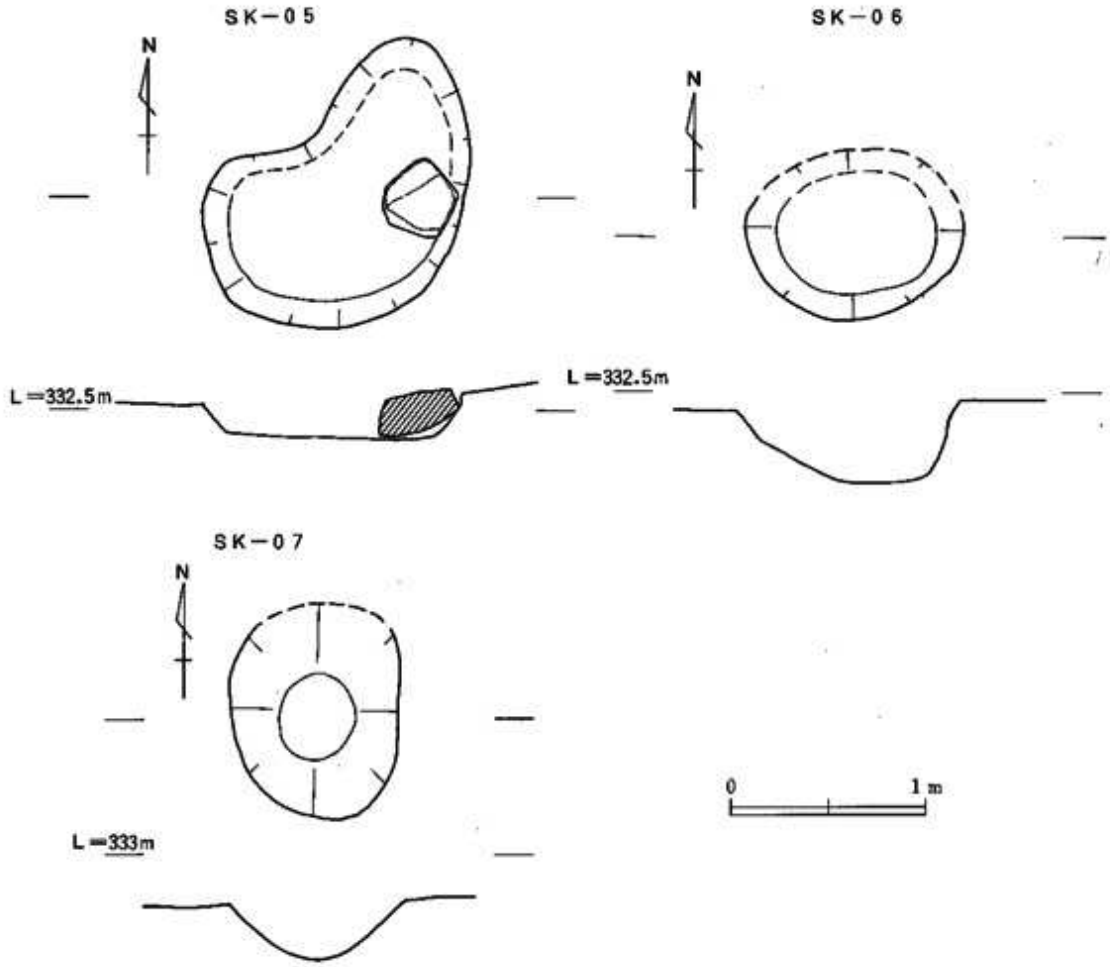


図8　沢遺跡（7次）土坑実測図(2)

(3) 出　土　遺　物

出土遺物は縄文土器、サヌカイト剝片、土師器、陶器、磁器、鉄製品、銅製品等が認められる。第1～3層からは中世までの遺物、第4・5層からは縄文土器、サヌカイト剝片等が出土している。また、一部の掘り下げを行ったにすぎないが、ＳＤ－０１からは土師器、陶器、磁器、鉄釘、鉄刀、小柄等、土坑からは土師器、磁器等が出土している。

①第1～第3層出土遺物（図9・10、表4・6）

土器は、瓦器、土師器、陶磁器が出土しており、うち3点が図化できた(図9)。1の瓦器は内外面とも粗いヘラミガキが施され、口縁端部内面に1条の沈線が認められる。13世紀前葉～中葉に比定される。4は、土師器土釜の口縁部を円形に加工した円形土製品である。個々の数値等は表4にまとめた。

また、6点の鉄釘（角釘）が出土しているが、いずれも破片である（図10)。個々の数値等は表6にまとめた。

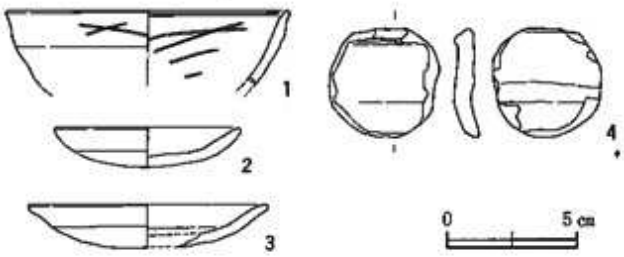


図9　沢遺跡（7次）出土土器実測図(1)

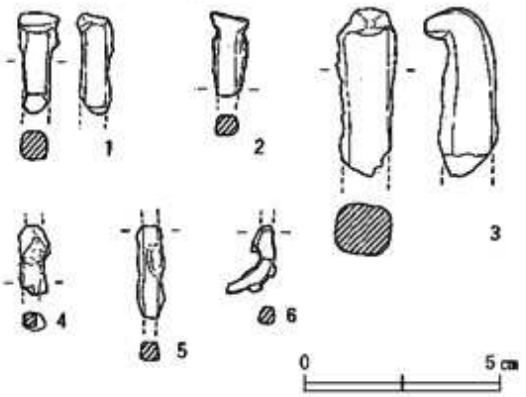


図10　沢遺跡（7次）出土金属製品実測図(1)

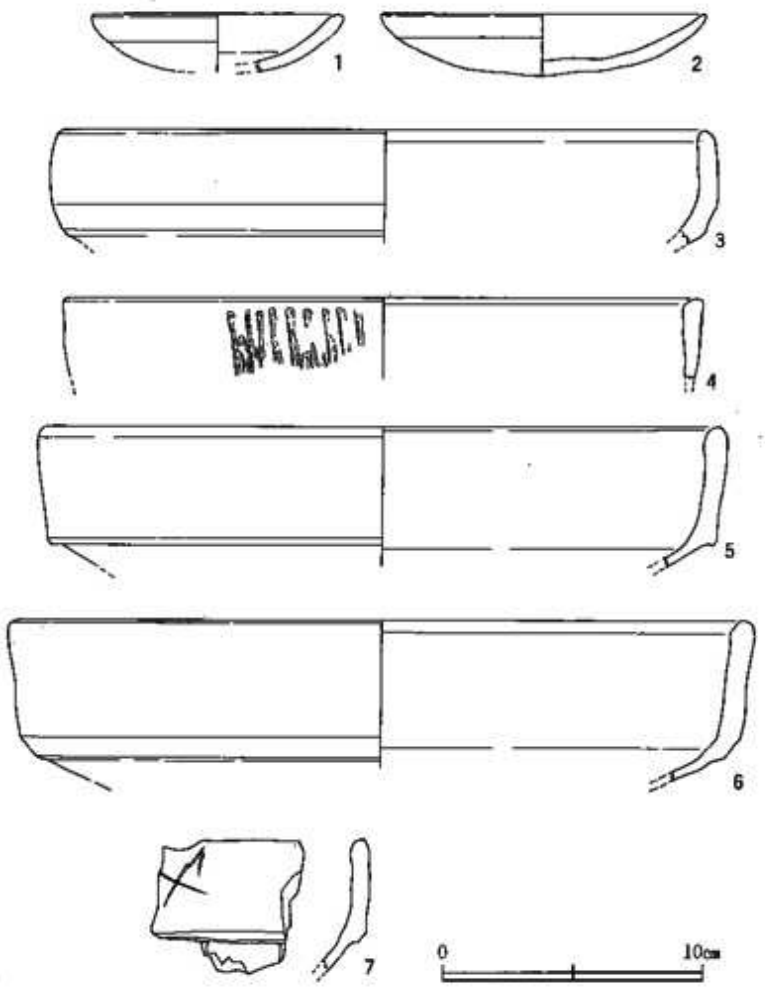


図11　沢遺跡（7次）出土土器実測図(2)

②ＳＤ－０１出土遺物（図11～13、表４）

土器は、縄文土器、弥生土器、瓦器、土師器、陶器、磁器が出土しているが、うち９点を図化した。焙烙（図11－３～７）は径24.0～27.8㎝あり、内外面にヨコナデを施す。個々の数値等は表４にまとめた。

鉄製品は、鉄釘１点、鉄刀子１点、火打鎌？１点、銅製小柄１点が出土しているが、いずれも破片である（図13）。現存長等は表６にまとめた。

③土坑出土遺物（図14）

先掲の土坑群からは、土師器、陶器、磁器、サヌカイト剥片等が出土しているが、いずれも小片で詳細な時期は明らかにできない。ＳＫ－０３出土のサヌカイト剥片（図14）は、上端部のほぼ半分を欠失している。ネガティヴ面に一部、自然面が残る。

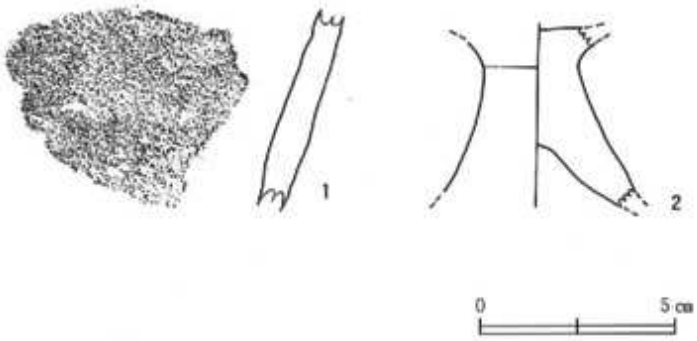


図12　沢遺跡（７次）出土土器実測図(3)

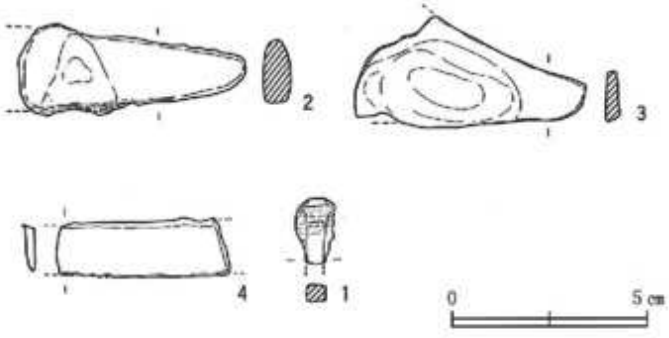


図13　沢遺跡（７次）出土金属製品実測図(2)

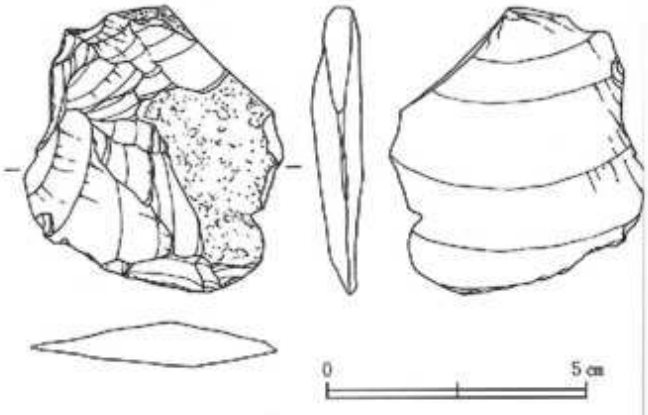


図14　沢遺跡（７次）出土石製品実測図

④第４・５層出土遺物（図15・表５）

概ね中期末から後期前葉にかけてと考えられる縄文土器が出土した。ここでは出土した土器を文様、部位から以下のように分類した。

１類　有文土器を１類とし、文様の違いから次のように細分した。

１Ａ類　櫛歯状の工具による条線を施すもの。

１Ｂ類　磨消縄文系の土器。

２類　縄文をもつものを一括した。

３類　無文土器のうち、調整の違いから次のように細分した。

３Ａ類　外面に条痕を施すもの。

３Ｂ類　条痕をもたず、内外面とも無文のもの。

４類　底部片を一括した。

１Ａ類（図15－１～６）

櫛歯状工具により縦位の蛇行する条線を描く半粗製の深鉢である。２個体７点中６点を図化した。１・２・３・６は文様や胎土、色調から同一個体と考えられる。１、２は口縁部であり、口縁端部にはD字の刺突をもつ。３、６は蛇行する条線同士が互いに交差しあう。３は条線８本を１単位とする工具による施文である。４はわずかに条線がみとめられる。４と５は同一個体であろう。

この１Ａ類の土器は、沢遺跡では多くみられるものであり（岡崎他　1987）、近畿地方で中期末からその系譜を辿ることができる。これまで後期前葉と報告されているが（岡崎他　1987）、ここでは時期に幅をもたせて中期末から後期前葉にかけてのものと考えておく。

１Ｂ類（図15－７）

磨消縄文系の土器であり、１点出土した。文様は充填縄文と考えられ、曲線的な沈線の区画内に縄文が認められる。縄文は上より細かいＬＲ、ＲＬ、ＬＲ縄文である。細片のため詳細な時期は明らかにできないが、中期末～後期前葉と考えられる。

２類（図15－８・９）

３点中２点を図化した。８は摩滅しているが、外面はＬＲ縄文を施したのち上方をナデている。９は外面にＬＲ縄文を施す。

３Ａ類（図15－10）

１点出土した。外面は横位の条痕調整を施す。内面はナデ調整である。

３Ｂ類（図15－11）

１点を図化した。11の外面はケズリ調整である。胎土、色調、調整から４・５と同一個体と考えられるが、文様がないことからここでは３Ｂ類としておく。

４類（図15－12～14）

出土した３点全てを図化した。ともに平底の破片である。12は復元底径11.2cmを測る。外面はケ

ズリ、内面は横位の条痕調整である。4・5・11と同一個体であろうか。13は径を復元することはできない。内面はナデ、底面は平滑なナデである。14は復元底径5.5cmを測る、やや小型の平底であり、立ち上がりは軽く踏ん張る。内外面ともナデ調整である。

（第4・5層出土遺物の項　横澤　慈）

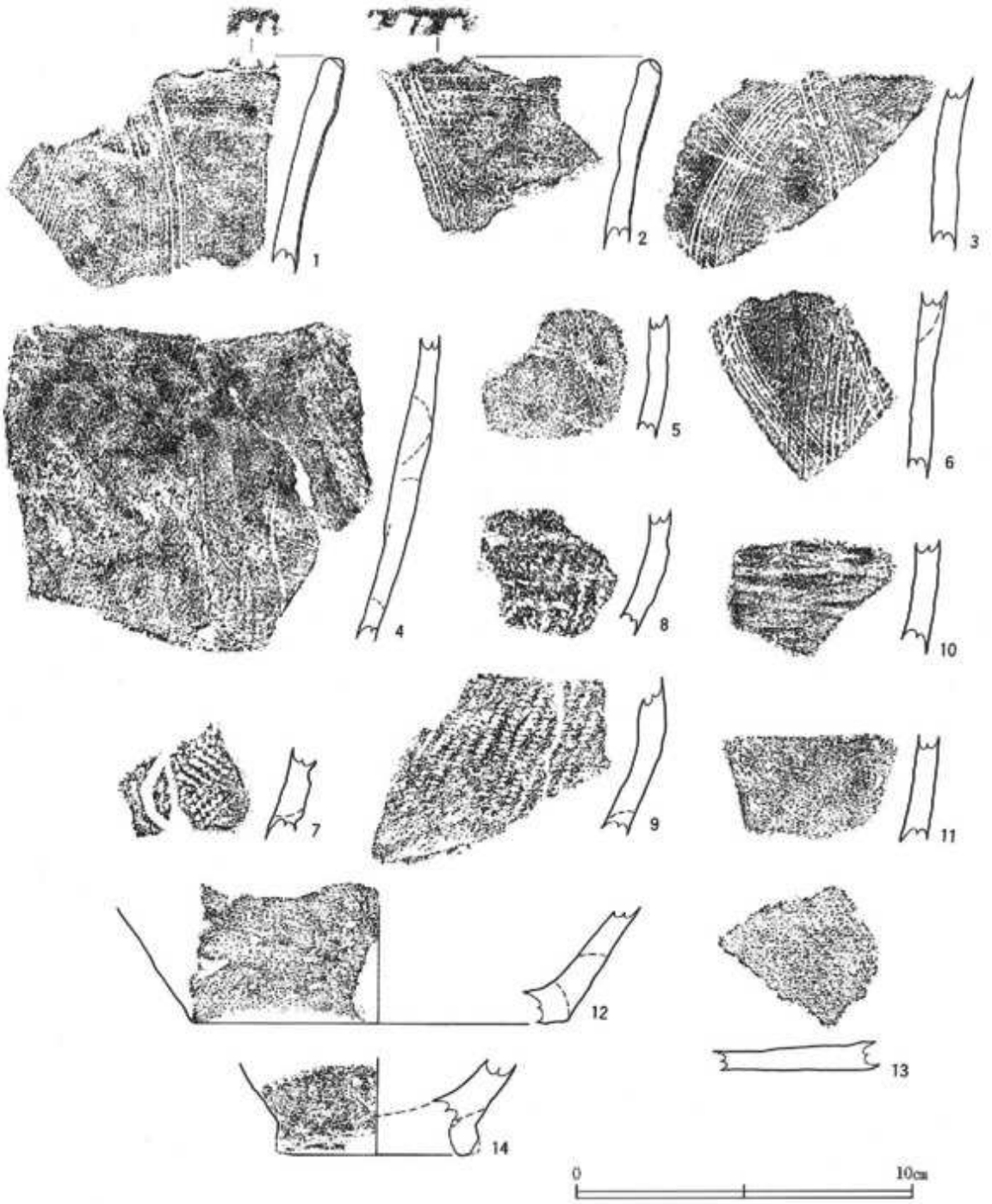


図15　沢遺跡（7次）出土土器実測図(4)

表4　沢遺跡（7次）出土土器等観察表(1)

挿図番号	器　種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備　考
9－1	瓦器　椀	復元口径　10.8 残存高　7.8	口縁端部内面に1条の沈線。	内外面に横方向の粗いヘラミガキ。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	第1層出土
9－2	土師皿	復元口径　7.0 器　高　1.5	口縁部は外傾状に立ち上り、底部は丸みをもつ	口縁部は内外面ともヨコナデ、他はナデ。	色調　黒褐色 胎土　精良 焼成　良好	第3層出土
9－3	土師皿	復元口径　9.2 器　高　1.6	口縁部は外傾状に立ち上り、端部はやや外反。	口縁部は内外面ともヨコナデ、他はナデ。	色調　浅黄橙色 胎土　精良 焼成　良好	第3層出土
9－4	円形土製品	直　径　4.2 器　厚　0.5～0.7	土師器土釜の口縁部を円形に加工。	内外面ともヨコナデ・ナデ。	色調　浅黄橙色 胎土　精良 焼成　良好	採集
11－1	土師皿	復元口径　9.4 残存高　2.2	口縁部は内彎気味に立ち上る。端部は肥厚し丸い。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	色調　浅黄橙色 胎土　精良 焼成　良好	SD－01出土
11－2	土師皿	復元口径　12.4 器　高　2.4	口縁部は外傾状に立ち上り端部は尖り気味。	口縁部は内外面ともヨコナデ。	色調　浅黄橙色 胎土　精良 焼成　良好	SD－01出土
11－3	土師器 焙烙	復元口径　24.6 残存高　4.4	口縁部は内彎し上方に立ち上る。	内外面ともヨコナデ。外面の稜にはケズリ。	色調　にぶい橙色 胎土　精良 焼成　良	SD－01出土
11－4	土師器 焙烙	復元口径　24.0 残存高　3.1	口縁部は直線的にのび、口縁端部は内傾する面をもつ。	内面はヨコナデ。外面はタタキののちヨコナデ。	色調　内面　浅黄橙色 外面　にぶい褐色 胎土　精良 焼成　良好	SD－01出土
11－5	土師器 焙烙	復元口径　26.0 残存高　5.4	口縁部は直線的にのび、口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともヨコナデ。外面の稜にはケズリ。	色調　内面　橙色 外面　黄褐色 胎土　精良 焼成　良好	SD－01出土
11－6	土師器 焙烙	復元口径　27.8 残存高　6.2	口縁部は直線的にのび、口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともヨコナデ。外面の稜にはケズリ。	色調　内面　橙色 外面　灰褐色 胎土　精良 焼成　良好	SD－01出土
11－7	土師器 焙烙	残存高　5.1	口縁部は内彎気味にのび、口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともヨコナデ。外面の稜にはケズリ。	色調　内面　にぶい橙色 外面　黒褐色 胎土　精良 焼成　良好	SD－01出土 外面に×の刻線
12－1	縄文土器 深鉢	(体部)		内外面ともナデ。	色調　内面　暗灰黄色 外面　黄褐色 胎土　密 焼成　良	SD－01出土
12－2	弥生土器 高杯	基部径　2.4 残存高　4.7		(内外面とも摩滅)	色調　内面　にぶい橙色 外面　黒褐色 胎土　粗 焼成　良	SD－01出土

表5　沢遺跡（7次）出土縄文土器観察表

挿図番号	分類	出土層位	部位	文様	調整		色調		備考
					内面	外面	内面	外面	
15－1	1A類	第5層(黒色土)	口縁	櫛歯状工具による縦位条線	ナデ	ナデ	2.5Y7/2(灰黄)	7.5YR3/2(黒褐)、10YR4/2(灰黄褐)	口縁端部に刻み
15－2	1A類	第5層(黒色土)	口縁	櫛歯状工具による縦位条線	ナデ	ナデ	10YR5/2(灰黄褐)	7.5YR3/2(黒褐)、7.5YR1.7/1(黒)	口縁端部に刻み、1と同一個体
15－3	1A類	第5層(黒色土)	胴部	櫛歯状工具による縦位条線	ナデ	ナデ	2.5Y7/4(浅黄)	7.5YR3/1(黒褐)	1と同一個体
15－4	1A類	第5層(黒色土)	胴部	櫛歯状工具による縦位条線	ナデ	ケズリ	2.5Y6/2(にぶい黄)	10YR6/2(灰黄褐)	
15－5	1A類	第5層(黒色土)	胴部	櫛歯状工具による縦位条線	ナデ	ケズリ？	2.5Y7/2(灰黄)、2.5Y5/2(暗灰黄)	2.5Y5/2(暗灰黄)	4と同一個体
15－6	1A類	第5層(黒色土)	胴部	櫛歯状工具による縦位条線	ナデ	ナデ	2.5Y5/2(暗灰黄)	10YR2/2・10YR3/2(黒褐)	1と同一個体
15－7	1B類	第5層(黒色土)	胴部	充填縄文	ミガキ？	ナデ	10Y3/1(黒褐)	10YR6/3(にぶい黄橙)	
15－8	2類	第5層(黒色土)	胴部	縄文(LR)	ミガキ？	ナデ	2.5Y6/3(にぶい黄)	10YR5/4(にぶい黄褐)	
15－9	2類	第4層(灰色土)	胴部	縄文(LR)	ケズリ	ナデ？	2.5Y5/3(黄褐)、10YR4/2(灰黄褐)	2.5Y2/1(黒)、2.5Y4/1(黄灰)	
15－10	3A類	第4層(灰色土)	胴部	無文	ナデ	横位条痕	10YR6/4(にぶい黄橙)	10YR3/1(黄褐)	
15－11	3B類	第5層(黒色土)	胴部	無文	ナデ	ケズリ？	10YR2/1(黒)、2.5Y6/3(にぶい黄)	2.5YR5/3(黄褐)	4と同一個体
15－12	4類	第5層(黒色土)	底部	無文	軽い条痕	ケズリ？	10YR6/4(にぶい黄橙)	10YR5/4(にぶい黄褐)	4と同一個体？ 復元底径　11.2cm 残存高　3.45cm
15－13	4類	第5層(黒色土)	底部	無文	ナデ	ナデ	10YR6/3(にぶい黄橙)	10YR6/2(灰黄褐)	
15－14	4類	第4層(灰色土)	底部	無文	ナデ	ナデ	7.5YR4/2(灰褐)、	10YR5/3(にぶい黄褐)、10Y3/1(黒褐)	復元底径　5.5cm 残存高　2.9cm

表6　沢遺跡（7次）出土金属製品観察表

挿図番号	名称	全長(現存長)(cm)	断面(cm)	頭部の形態	備考
10－1	鉄釘	(2.6)	0.8×0.7	折り返し	1～2層出土
10－2	鉄釘	(2.2)	0.5×0.6	折り返し	1層出土
10－3	鉄釘	(4.4)	1.3×1.5	角	1層出土
10－4	鉄釘	(1.8)	0.4×0.4		1層出土
10－5	鉄釘	(2.4)	0.5×0.5		1層出土
10－6	鉄釘	(2.5)	0.4×0.4		1層出土
13－1	鉄釘	(2.2)	0.4×0.5	折り返し	SD－01出土、木質付着
13－2	鉄刀？	(5.8)			SD－01出土、茎部
13－3	火打鎌？	(6.0)			SD－01出土、鉄製
13－4	小柄	(4.5)	1.2×0.2		SD－01出土、銅製鞘

4 ま と め

沢遺跡からは、第1次調査や採集資料等から縄文時代中期末葉から縄文時代晩期、弥生時代前期～後期の土器が出土している。なかでも縄文時代後期前葉、弥生時代中期（第Ⅲ様式）～弥生時代後期（第Ⅴ様式）の土器が多く確認されていることから、この頃に遺構の存在を考えていたところである。

今回の発掘調査によって、縄文時代の遺構面の広がりが7次調査地周辺にまで及ぶことが明らかとなったが、弥生時代の遺構面については、中世以降の改変によってその状況は明らかにできない。中世以降の遺構は土坑・溝で構成されているが、これらの性格は明らかにできない。

5 抄 録

遺跡名	沢（さわ）遺跡（奈良県遺跡番号15-D-84、榛原町遺跡番号2-544）
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字沢1417番地
遺跡規模	範囲：南北約130m、東西約150m
種別	縄文時代～中世の遺物散布地
調査主体	榛原町教育委員会
調査担当者	榛原町教育委員会　生涯学習課　技師　柳澤一宏
調査原因	個人の住宅建設工事（事業者：砥出芳廣）
現地調査期間	1997（平成9）年11月18日～1998（平成10）3月10日
調査面積	68㎡
検出遺構	土坑、溝
検出遺物	縄文土器、サヌカイト剥片、土師器、陶器、磁器、鉄刀？、鉄釘、火打鎌？、小柄
	（整理箱1箱）
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

参考文献

岡崎晋明編　1987「宇陀の縄文土器と石器」『大和考古資料目録』第14集　橿原考古学研究所附属博物館

Ⅳ　沢遺跡第８次発掘調査概要

1　調査の契機と経過

(1) 調　査　史　抄

沢遺跡は奈良県宇陀郡榛原町大字沢に位置し、現状は大半が畑地、一部が宅地や道路となっている。この遺跡は1955年（昭和30年）の沢集落内の町道拡幅工事に伴って多くの遺物が出土したことによってその存在が知られるようになり、その後、1963年（昭和38年）に第１次調査、1987年に第２次調査が行われている。榛原町教育委員会では、1991年に個人住宅建設工事に伴う発掘調査（第３次調査）、1992年に個人の農業用倉庫建設工事に伴う発掘調査（第４次調査）、1996年に個人住宅及び倉庫建設に伴う発掘調査（第５次調査）を実施している。

遺跡中央部の標高約333ｍの畑地において、個人の農地改良工事が計画され、これに伴う発掘調査を当委員会が継続的に担当することとなり、1997（平成９）年１月～３月には第６次調査を実施している。今回の調査地（第８次調査地）は、第６次調査地の北隣にあたり、現地調査を1997（平成９年12月９日～1998（平成10）年３月10日まで行った。

2　位　置　と　環　境

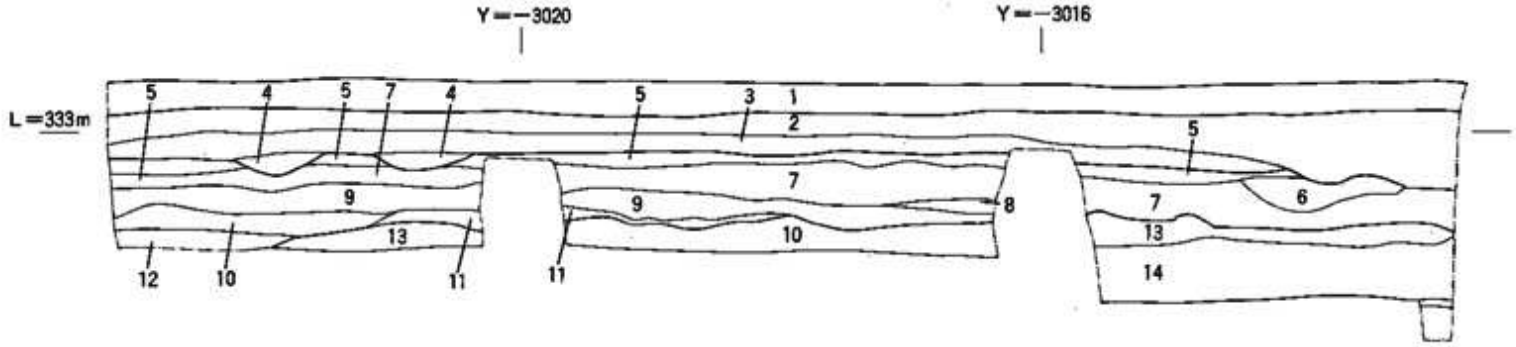
沢遺跡は、芳野川東岸の標高331.5～335.5ｍの台地状の畑地に位置し、現在の芳野川からは約150～300ｍの距離をはかる。遺跡の北方、南方、西方の三方は芳野川に灌ぐ小支流である谷川や芳野川の氾濫原となっている。地形および遺物の散布状況から遺跡の範囲を推察すれば、氾濫原より約１～２ｍ高くなっている畑地が中心となってくる。遺跡の東方には沢城跡から南西にのびる丘陵先端部がひかえ、この山裾までが遺跡の範囲と考えられる。

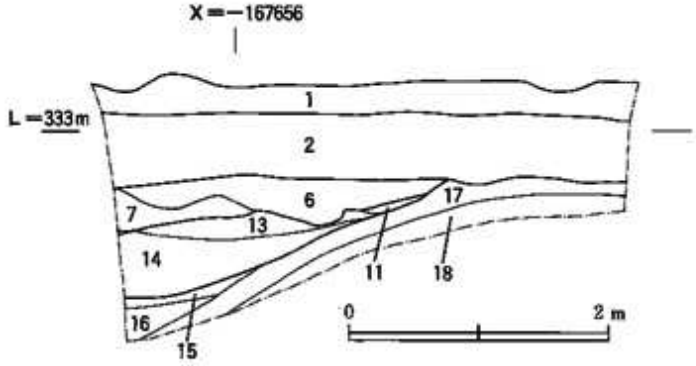
沢の谷川を挟んで南約200ｍの尾根上には弥生時代後期の住居跡や古墳時代中期末～後期初頭の古墳、中世の建物遺構（寺院跡？）などが確認されている延命寺遺跡、約400ｍ東方には縄文晩期～弥生時代前期・中世の遺物が出土している下城・馬場遺跡、さらに東方には古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が確認されている。（図３）

3　遺　跡　の　調　査

(1) 調査区と基本層序

今回の調査地は、遺跡の中心部分の畑地で、今年度は、第６次調査地の北隣に東西方向のトレンチ（長さ約10ｍ、幅約４ｍ）を設定した（図４）。





1	褐色土	〈10YR 4/4〉	第1層
2	褐色土	〈10YR 4/6〉	第2層
3	暗灰色土	〈10YR 3/4〉	
4	にぶい黄褐色土	〈10YR 5/4〉	素掘溝
5	暗灰色土(やや粘質)	〈10YR 3/4〉	第3層
6	褐色粗砂	〈7.5YR 4/4〉	
7	暗褐色砂質土	〈10YR 3/3〉	
8	褐色砂	〈10YR 4/4〉	
9	褐色細砂	〈10YR 4/4〉	
10	にぶい黄褐色砂	〈10YR 5/4〉	
11	褐色砂	〈7.5YR 4/6〉	
12	黄褐色砂	〈10YR 5/6〉	
13	暗灰黄色砂	〈2.5Y 5/2〉	第4層
14	灰オリーブ色土	〈2.5Y 5/2〉	
15	黒褐色粘土	〈10YR 3/2〉	第5層
16	暗灰黄色土	〈2.5Y 5/2〉	
17	黒褐色粘質土	〈7.5YR 3/1〉	
18	にぶい黄褐色土(やや砂質)	〈10YR 4/3〉	

図16　沢遺跡（8次）土層断面図

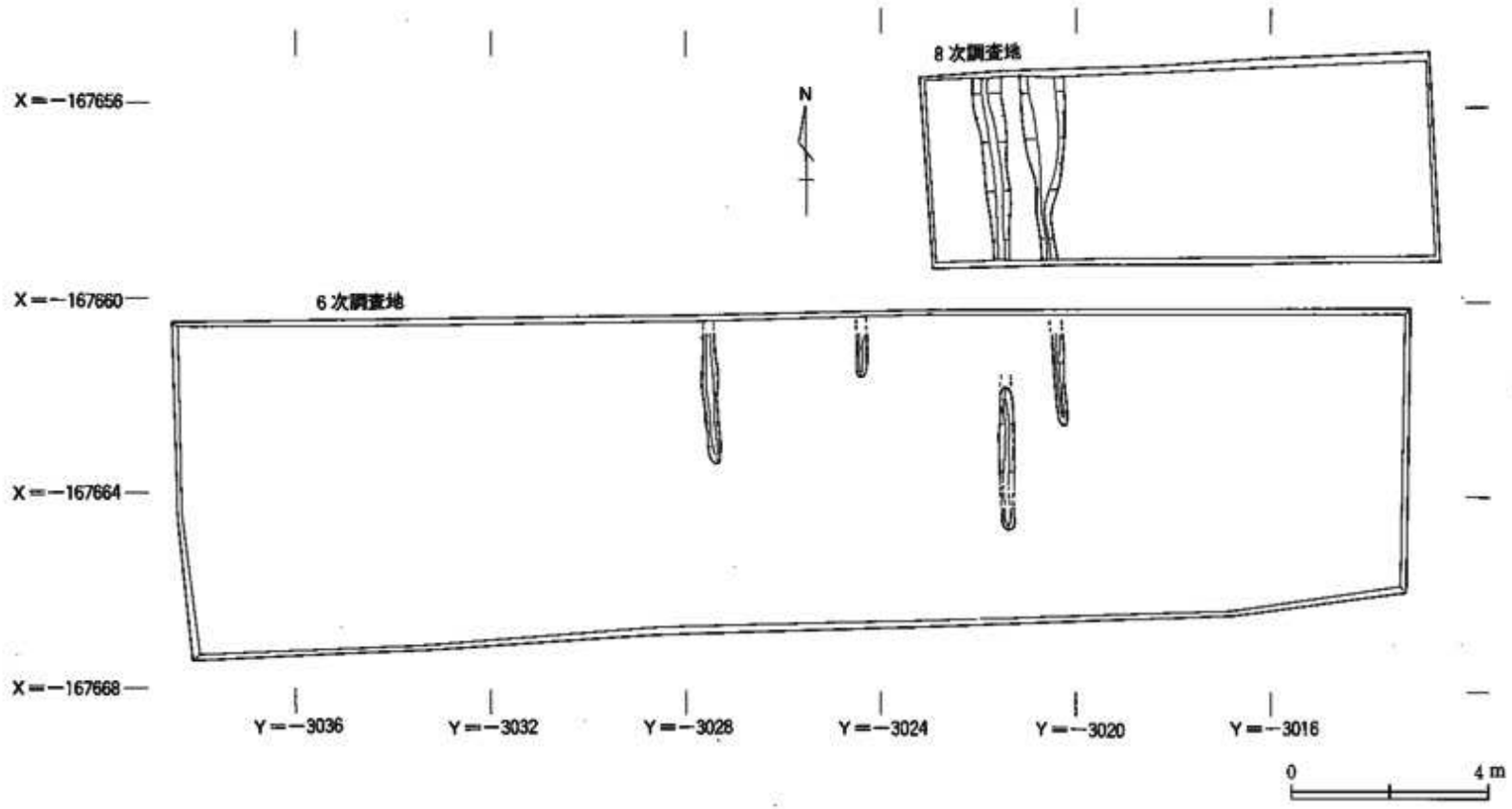


図17　沢遺跡（8次）第1遺構面平面図

調査区の基本層序は、第６次調査時とほぼ同様である。東端での基本土層は第１層が耕作土、第２層が褐色土等（床土）、第３層が暗褐色土・褐色細砂等、第４層が暗灰黄色砂・灰オリーブ色土等、第５層が黒褐色粘質土等となっている。第３層からは弥生時代前期～後期の土器片、第５層からは縄文時代後期～晩期の土器片が出土している（図16）。

(2) 検　出　遺　構

遺構は２時期のものを検出している。第１遺構面（中世以降）では溝、第２遺構面（弥生時代）では自然地形の落込みの一部を検出している。この様相は、第６次調査時と同様である。

①第１遺構面（図17）

調査区の西半において、南北方向の２条の素掘溝を検出した。いずれも第６次調査時の素掘溝に続くものである。現状での規模は、幅30～80㎝、深さ７～20㎝をはかり、埋土は、にぶい黄褐色土である。

②第２遺構面（図18）

第３層の暗褐色土・褐色細砂等、第４層の暗灰黄色砂・灰オリーブ色土等が堆積した落ち込み状の自然地形の隅部分を検出した。この自然地形の様相は、第６次調査時と同様である。

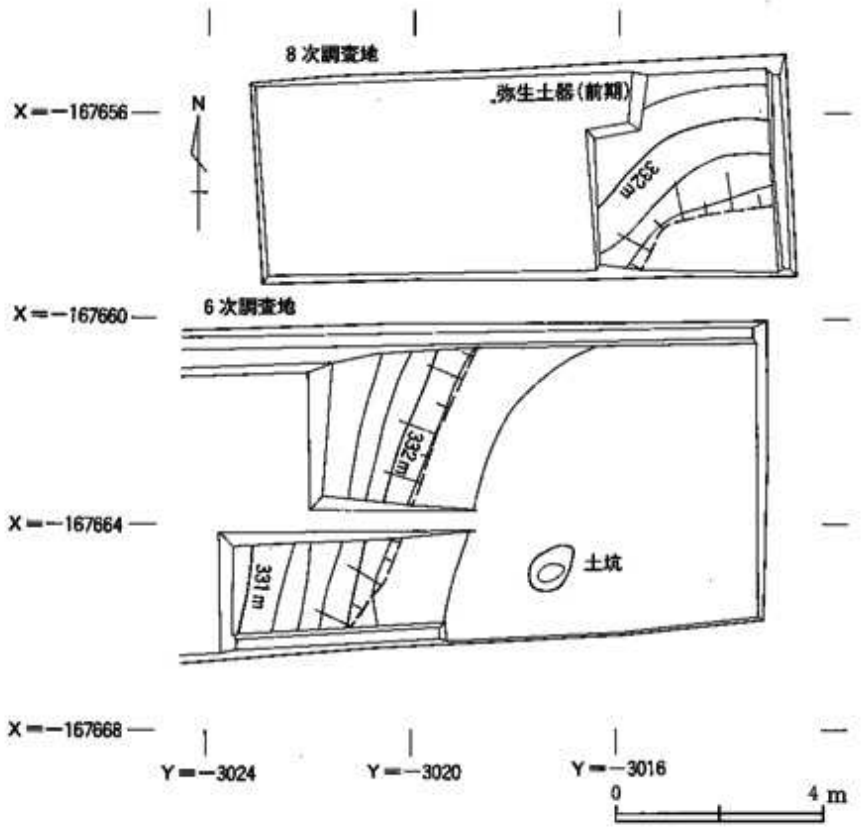


図18　沢遺跡（８次）第２遺構面平面図

③第３遺構面

第５層下にあると推定されるが、調査面積等の関係から検出していない。

(3) 出　土　遺　物

出土遺物は縄文土器、石鏃、サヌカイト剥片、弥生土器、須恵器、円筒埴輪、瓦器、土師器、土錘、陶器、磁器、鉄釘、鉄庖丁などが認められる。

①２層・第１遺構面出土遺物（図19～22、表７～10）

瓦器椀（図18－１）は、低い逆三角形の高台を貼り付ける。土師皿（図19－２・３）は口径9.6㎝、10㎝をはかり、２の口縁部は外反する（図19、表７）。

鉄製品は、釘４点、金具１点、庖丁１点が出土している（図20、表８）。

この他、土錘３点（図21、表９）、円筒埴輪片（図19－５、表７）石鏃（図22－２）が出土している。土錘は、いずれも心棒に粘土を巻き付けて成形している。円筒埴輪片は台形状のタガを貼り付ける。石鏃はサヌカイト製で基辺の突出度が強く、鏃身と茎部との区別が不明瞭な形態の凸基有茎式のものである。全長39.4㎝、幅16.7㎝、厚さ5.6㎝である。

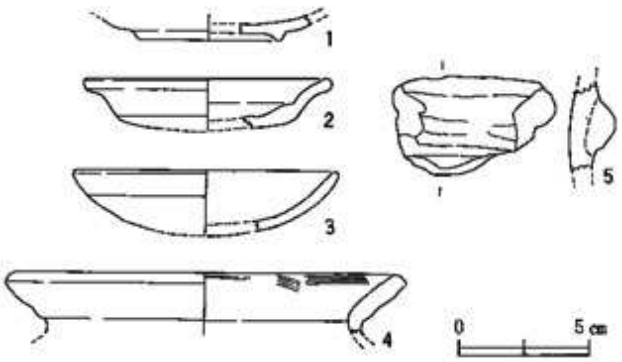


図19　沢遺跡（８次）出土土器等実測図

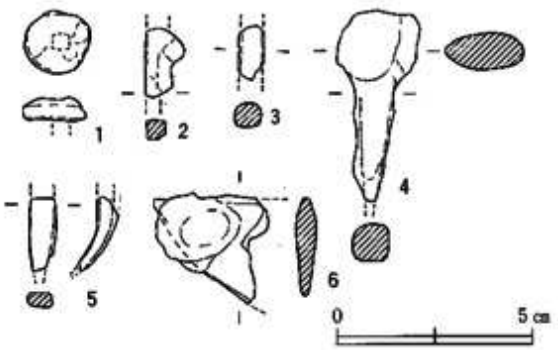


図20　沢遺跡（８次）出土鉄製品実測図

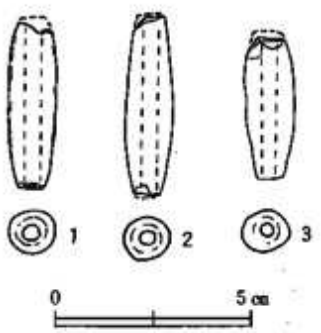


図21　沢遺跡（８次）出土土錘実測図

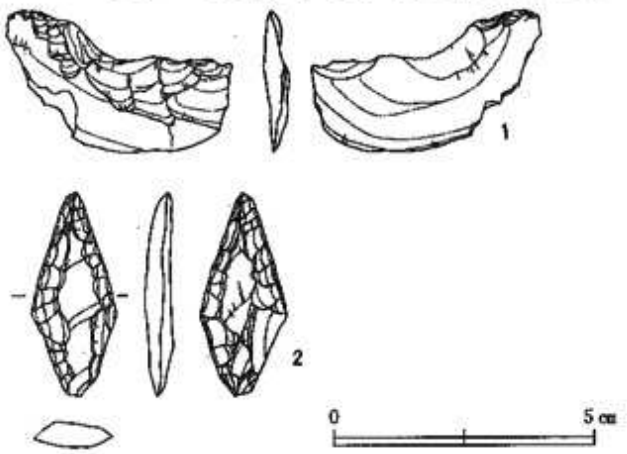


図22　沢遺跡（８次）出土石器実測図

②第３層出土遺物（図22・23、表７）

弥生土器５点を図化できた。１・３は壺胴部上半の破片で、２条のヘラ描き直線文を施す。２は壺頸部の破片で、３条のヘラ描き直線文を施す（図23）。この他には、横長剥片を素材とした二次調整剥片（またはノッチドスクレイパー）が認められる。打点を数回の調整により欠いており、調整は粗い（図22－１）。

③第４・５層出土遺物（図24、表10）

縄文土器７点を図化できた。これらの縄文土器は第４・５層にかけて出土しているが、整理の都合上、第２・３層からの出土資料もあわせて掲載することとする。縄文土器は凸帯文土器をはじめ、概ね晩期と考えられるものであり、以下のように分類した。

１類　凸帯文土器を一括した。口縁直下および胴部に１条の凸帯をめぐらすもので、口縁端部の調整と凸帯の貼り付けを同時に行なうものである。主に晩期末の長原式と考えられる。凸帯は断面デルタ（⊿）状を呈するもの（A類）、断面三角形（△）を呈するもの（B類）、胴部とに分類した。

２類　無文土器を一括した。調整の違いにより、無文のもの（A類）と、条痕調整を施すもの（B類）とに分類した。

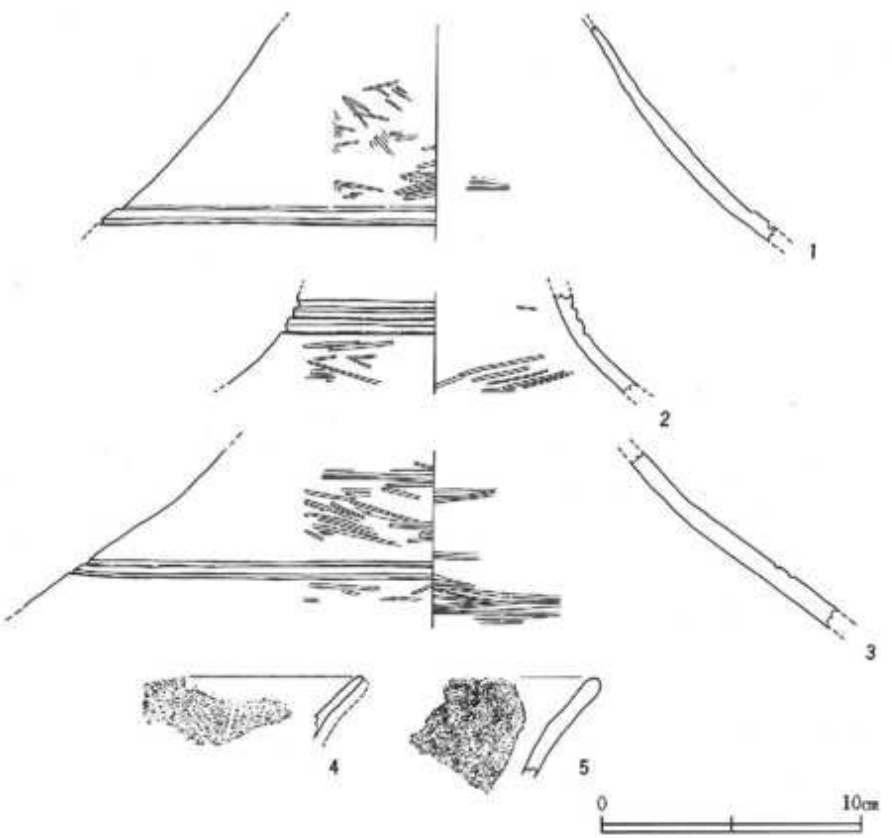


図23　沢遺跡（８次）出土弥生土器実測図

1A類（図24－1・2）

断面⊿状の凸帯を口縁に貼り付けるものである。口縁部側からのみ指で押さえて凸帯を扁平に貼り付ける。1は凸帯に刻みをもたない。2は凸帯にD字の刻みを施す。凸帯下には条痕を施す。内面にもわずかに条痕が認められる。全体的に薄く仕上げている。

1B類（図24－3）

口縁に断面△状の凸帯をめぐらすものである。凸帯は上下両方から指で押さえて貼り付ける。凸帯上に軽い刻みが認められる。

1類胴部（図24－4）

4はやや内傾ぎみに立ち上がるもので、肩部に1条の凸帯をめぐらす。凸帯は上から指で押さえて貼り付けるもので、断面形態は台形状を呈する。全体的に摩滅しているが、凸帯上にはかすかなD字の刻みがみられる。細片のため時期は判然としないが、船橋式～長原式あたりであろうか。

2A類（図24－5）

無文土器である。5はやや外反する口縁部片である。口縁端部には刻みをもつ。内外面ともナデ調整である。

2B類（図24－6・7）

いずれも条痕調整を施すものである。6は外面に縦位の条痕を施す。条痕の原体は巻貝と考えられる。内面はナデ調整であり、部分的に指頭痕が認められる。器壁には炭化物が付着している。7は体部下半の破片である。内面は横位、外面は縦位の条痕調整を施す。

（第4・5層出土遺物の項　横澤）

4　ま　と　め

沢遺跡からは、第1次調査や採集資料等から縄文時代中期末葉から縄文時代晩期、弥生時代前期～後期の土器が出土している。なかでも縄文時代後期前葉、弥生時代中期（第Ⅲ様式）～弥生時代後期（第Ⅴ様式）の土器が多く確認されていることから、この頃に遺構の存在を考えていたところである。

今回の発掘調査によって、中世以降の溝をはじめ、弥生時代前期～中期の旧地形（自然河道と類推される落込み）の一部も検出することができた。先に実施した第5・6次調査の成果とあわせて類推すると、弥生時代前期から中期にかけて起こった沢集落から芳野川へと灌ぐ谷川の氾濫等によって砂が堆積し、現地形が形成されたものと考えられる。縄文時代～弥生時代の住居跡は未確認ではあるが、これまでの遺構・遺物の検出状況及び地形から調査地北辺の標高333m～334m付近の高所と推定できる。また、先述のとおり、弥生時代前期の土器片の出土は、遺構には伴わないものの、特筆すべきものがあり、今後の調査によっては、資料の増加も期待できる。

3層の砂層中から出土した弥生時代前期の壺片は、大和第Ⅰ－2様式に相当し、当地域では最古の弥生土器片となる。

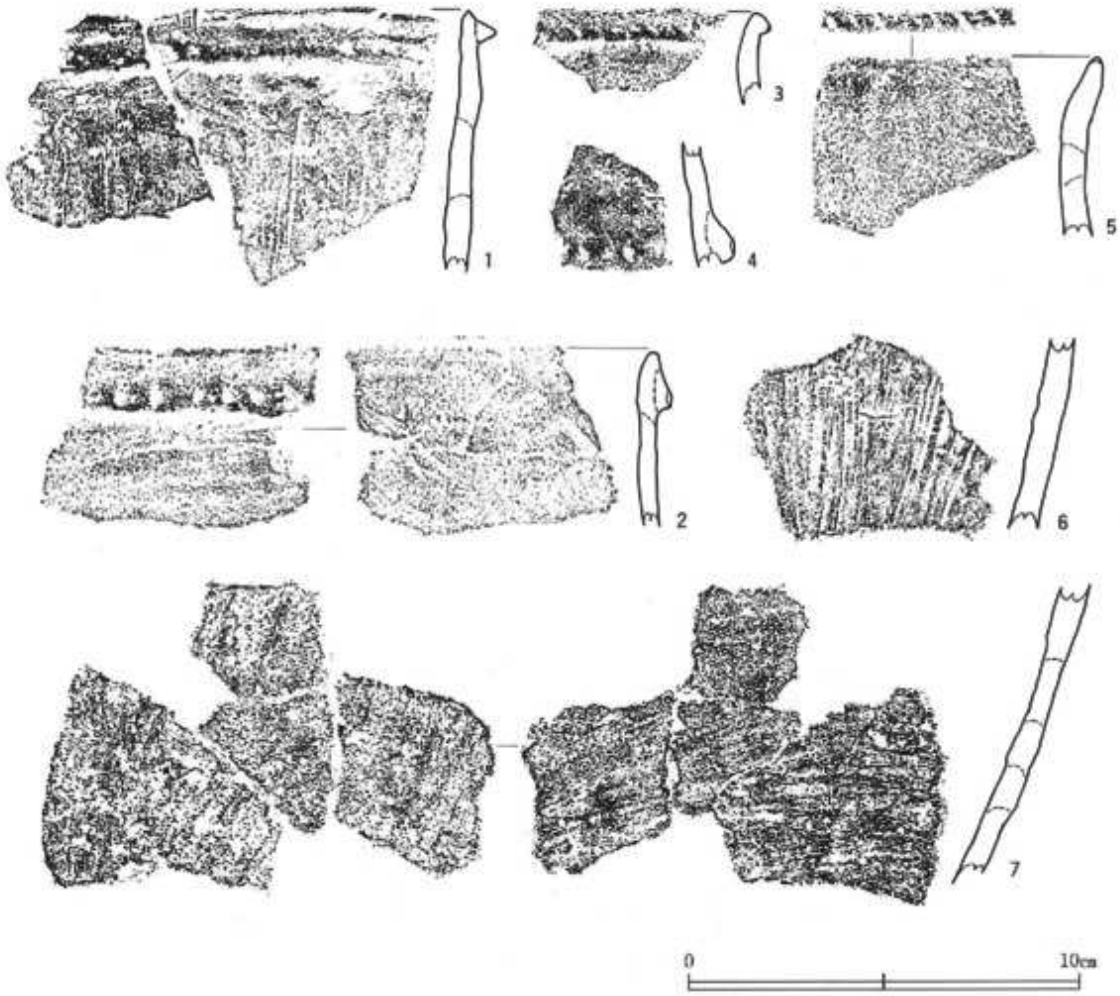


図24　沢遺跡（8次）出土縄文土器実測図

表7　沢遺跡（8次）出土土器等観察表

挿図番号	器　種	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調・胎土・焼成	備　考
19－1	瓦器　椀	復元高台径 5.4 現存高 1.0	低い逆三角形の高台を貼付	(内外面とも摩滅)	色調　灰白色 胎土　密 焼成　良	第2層出土
19－2	土師皿	復元口径 9.6 現存高 1.9	口縁部は外反、端部は肥厚し、丸い。	口縁部は内外面ともヨコナデ、他はナデ。	色調　にぶい橙色 胎土　密 焼成　良	第2層出土
19－3	土師皿	復元口径 10.0 現存高 2.4	口縁部は内彎気味に斜めに立ち上がり、端部は丸い。	口縁部は内外面ともヨコナデ、他はナデ。	色調　浅黄橙色 胎土　密 焼成　良	第2層出土
19－4	土師器 甕	復元口径 15.4 現存高 2.4	口縁端部は面取りを行い、外面に端面をもつ。	口縁部内面に横位ハケ。	色調　内面　にぶい黄褐色 外面　黄褐色 胎土　密 焼成　良	第2層出土
19－5	円筒埴輪		台形状のタガを貼り付ける。	(内外面とも摩滅)	色調　赤褐色 胎土　密 焼成　良	第2層出土
23－1	弥生土器 壺	(胴部上半)	削出により段を形成し、その下に2条のヘラ描き直線文。	内外面とも横位ミガキ。	色調　内面　にぶい黄橙色 外面　明赤褐色 胎土　密 焼成　良好	第3層出土
23－2	弥生土器 壺	(頸部)	3条のヘラ描き直線文。	内外面とも横位ミガキ。	色調　橙色 胎土　密 焼成　良好	第3層出土
23－3	弥生土器 壺	(胴部上半)	2条のヘラ描き直線文。	内外面とも横位ミガキ。	色調　内面　にぶい橙色 外面　橙色 胎土　密 焼成　良好	第3層出土
23－4	弥生土器 壺	(口縁部)	内面に3条刻線。	ナデ（外面剝離）。	色調　にぶい黄褐色 胎土　粗 焼成　良	第3層出土
23－5	弥生土器 壺	(口縁部)	口縁端部は丸い。	内外面ともナデ。	色調　内面　橙色 外面　明褐色 胎土　粗 焼成　良	第3層出土

表8　沢遺跡（8次）第2層出土鉄製品観察表

挿図番号	名　称	現存長 (cm)	身　部 (cm)	備　　考
20－1	鉄　釘	0.5	0.4×0.4	頭部は円形（頭部径1.7cm）
20－2	鉄　釘	1.7	0.5×0.5	
20－3	鉄　釘	1.4	0.6×0.6	
20－4	鉄　釘	4.9	0.9×0.9	頭部を延圧（厚さ0.9cm）
20－5	鉄金具	1.9	0.4×0.6	
20－6	鉄庖丁	2.9	(0.5×2.6)	身部は、現存最大部分

表9　沢遺跡（8次）出土土錘観察表

挿図番号	名　称	現存長 (cm)	身部径 (cm)	色調・胎土・焼成	備　考
21－1	土　錘	4.3	1.2	色調　黄橙色　胎土　密　焼成　良	第2層出土
21－2	土　錘	4.7	4.7	色調　にぶい黄橙色　胎土　密　焼成　良	第2層出土
21－3	土　錘	3.6	3.6	色調　褐灰色　胎土　粗　焼成　良	第2層出土

表10　沢遺跡（8次）出土縄文土器観察表

挿図番号	分　類	出土層位	部位	文　様	調　整		色　調		備　考
					内面	外面	内　面	外　面	
24－1	1A類	第4層(灰色土)	口縁	口縁下に⊿状の1条凸帯 凸帯上刻みなし	ナデ	軽い縦位条痕	10YR3/2(黒褐)、 2.5Y2/1(黒)	10YR3/1(黒褐)、 2.5Y2/1(黒)	長原式
24－2	1A類	第5層(黒色土)	口縁	口縁下に⊿状の1条凸帯 凸帯上D字刻み	斜位条痕、 ナデ	軽い横位条痕	10YR5/4(にぶい黄褐)	10YR4/2(灰黄褐)	長原式
24－3	1B類	第3層(砂質土)	口縁	口縁下に△状の1条凸帯 凸帯上軽い刻み	ナデ	ナデ	2.5Y2/1(黒)	2.5Y2/1(黒)	長原式
24－4	1類胴部	第2層	胴部	肩部に1条の凸帯 凸帯上軽いD字刻み	ナデ	ナデ	2.5Y3/1(黒褐)	10YR4/4(褐)、 2.5YR5/3(黄褐)	全体的に摩滅、船橋式～長原式？
24－5	2A類	第2層	口縁	無文	ナデ	ナデ	2.5Y2/1(黒)、 2.5Y3/1(黒褐)	10YR5/4(にぶい黄褐)	口縁端部に刻み
24－6	2B類	第4層(灰色土)	胴部	無文	ナデ、 指頭痕	縦位条痕	2.5Y2/1(黒)	10YR7/3・10YR6/3 (にぶい黄橙)	
24－7	2B類	第5層	胴部	無文	横位条痕	縦位条痕	2.5Y2/1(黒)	10YR3/4(黒)、 10YR2/1(暗褐)	

5 抄　　録

遺跡名	沢遺跡（奈良県遺跡番号15-D-84、榛原町遺跡番号2-544）
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字沢980番地
遺跡規模	範囲：南北約130ｍ、東西約150ｍ
種別	縄文時代～中世の遺物散布地、縄文時代～弥生時代の集落跡
調査主体	榛原町教育委員会
調査担当者	榛原町教育委員会　生涯学習課　技師　柳澤一宏
調査原因	個人の農地地盤改良工事（事業者：森岡茂雄）
現地調査期間	1997（平成９）年12月９日～1998（平成10）年３月10日
調査面積	約43㎡
検出遺構	溝、自然地形
検出遺物	縄文土器、石鏃、サヌカイト剥片、弥生土器、須恵器、円筒埴輪、瓦器、土師器、土錘、陶器、磁器、鉄釘、鉄庖丁等 （整理箱１箱）
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

参考文献

家根祥多　1981「４．晩期の土器　近畿地方の土器」『縄文文化の研究』４　縄文土器Ⅱ　雄山閣

藤田三郎、松本洋明　1989「２　大和地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社

V　下城・馬場遺跡第4次発掘調査概要

1　調査の契機と経過

下城・馬場遺跡は奈良県宇陀郡榛原町大字沢に位置し、沢城跡から南方へ派生する尾根筋とその間を流れる小支流によって形成された小規模な谷地形の先端部の一角を占めている。遺跡は尾根の西斜面に広がり、3段にわたる平坦面が形成されている。遺跡の現状は大半が畑地や水田となっており、以前から縄文時代から中世にいたる遺物が散布しているところでもある。

1984年には「沢集落センター」の建設に伴う発掘調査（1次調査）を行い、縄文時代～弥生時代、中世（12～13世紀）の遺構・遺物を検出しているところである。

その後、遺跡最高所の平坦面において、個人による土地改良工事が計画されたため、遺構・遺物

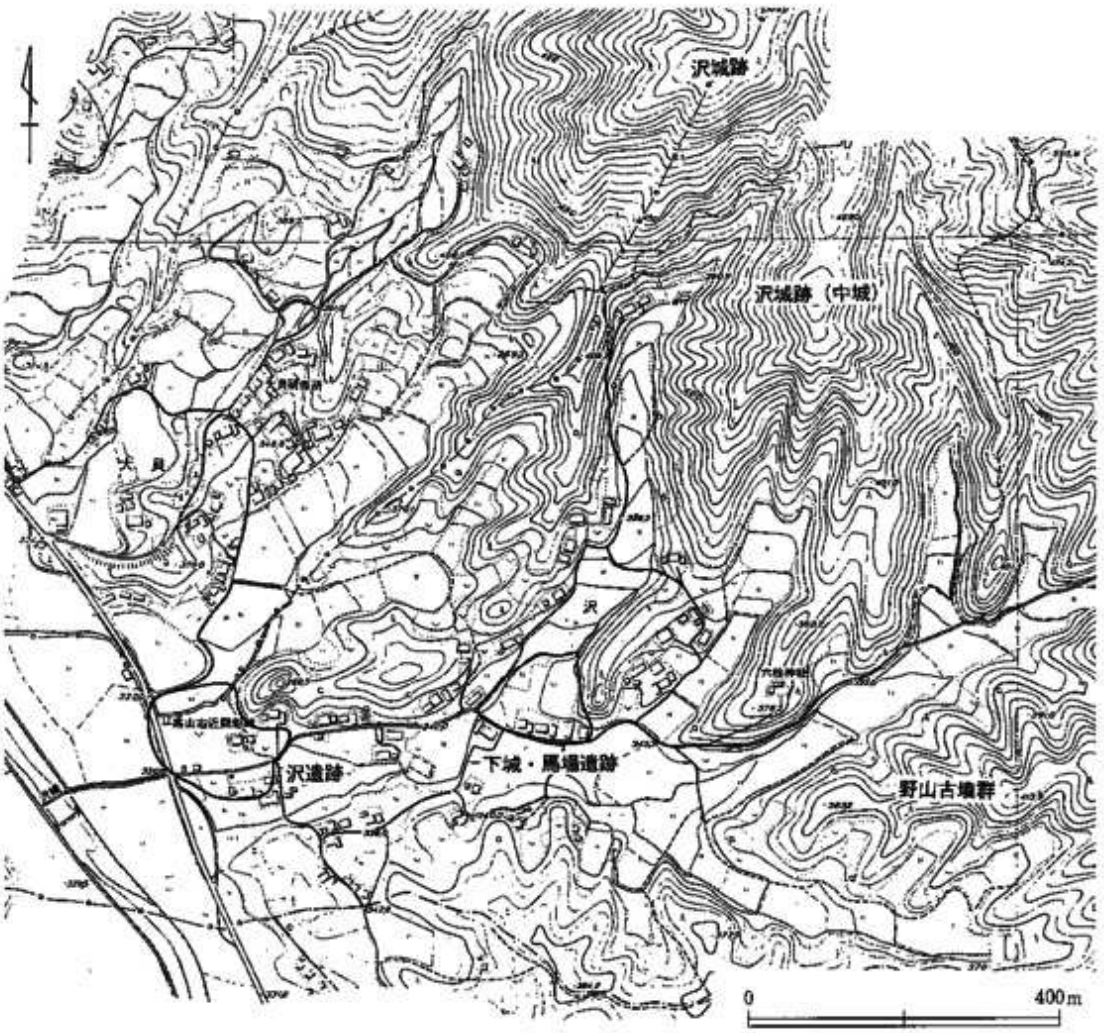


図25　下城・馬場遺跡位置図

の状況を把握する発掘調査を継続的に実施することとなった。現地調査は、1994年1月から3月（2次調査）、1995年2月から3月（3次調査）に行い、礎石建物跡等の遺構をはじめ、多くの遺物を検出している。他遺跡の調査等の関係上、その後の発掘調査が遅延していたが、1997年11月から1998年3月にかけて4次調査を行うことができた。

2 位置と環境

下城・馬場遺跡は、先述のとおり、尾根の西斜面、標高約339m～351mの一角を占めており、芳野川が流れる西方への眺望が比較的良好で、遠く宇陀地域の代表的な中世山城である秋山城跡を望むことができる。また、北方には沢城跡や伊那佐山を仰ぎ見ることができる。この遺跡の周辺は縄文時代～中世の沢遺跡、弥生時代～中世の延命寺遺跡、古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が集中している地域でもある。

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本土層

3次調査の北隣に幅3～8m、長さ約20mのトレンチを設定した（図26）。

基本層序は、第1層が耕作土、第2層がにぶい黄橙色砂質土等、第3層が黄灰褐色土、灰褐色粘質土等となっている。第3層を除去すると、第2遺構面となる。地表から第2遺構面までの深さは約60～100cmである。第4層（暗灰黄色土・黒褐色粘質土等）、第5層（黒褐色土等）を除去すると、第3遺構面となり、地表から第3遺構面までの深さは約80～130cmである（図28）。

(2) 検出遺構

今回の調査は、3次調査地北側において行い、第2遺構面では礎石建物遺構、ピット、焼土面等を確認している。第2遺構面を形成する第4層・5層を掘り下げると、第3遺構面が認められ、焼土とともに礎石建物遺構、ピット等を検出している。

3次調査時に検出した第2遺構面の礎石建物遺構は、4次調査地までは及ばず、南北5.9m以上（3間以上）、東西5.9m以上、（3間以上）であった可能性が高い。今回、6石の礎石を検出したが、具体的な建物配置等は明らかにできない。なお、これらの礎石建物は、1間を6尺5寸（約197cm）とする基準竿として用いていると考えられる（図27）。

第3遺構面の礎石建物遺構は、第2遺構面の礎石建物遺構と重複する部分が多く、現時点では、その全容を明らかにできないが、2棟の存在が予想され、調査地西端の礎石建物遺構は、さらに北側へ広がっていると考えられる。

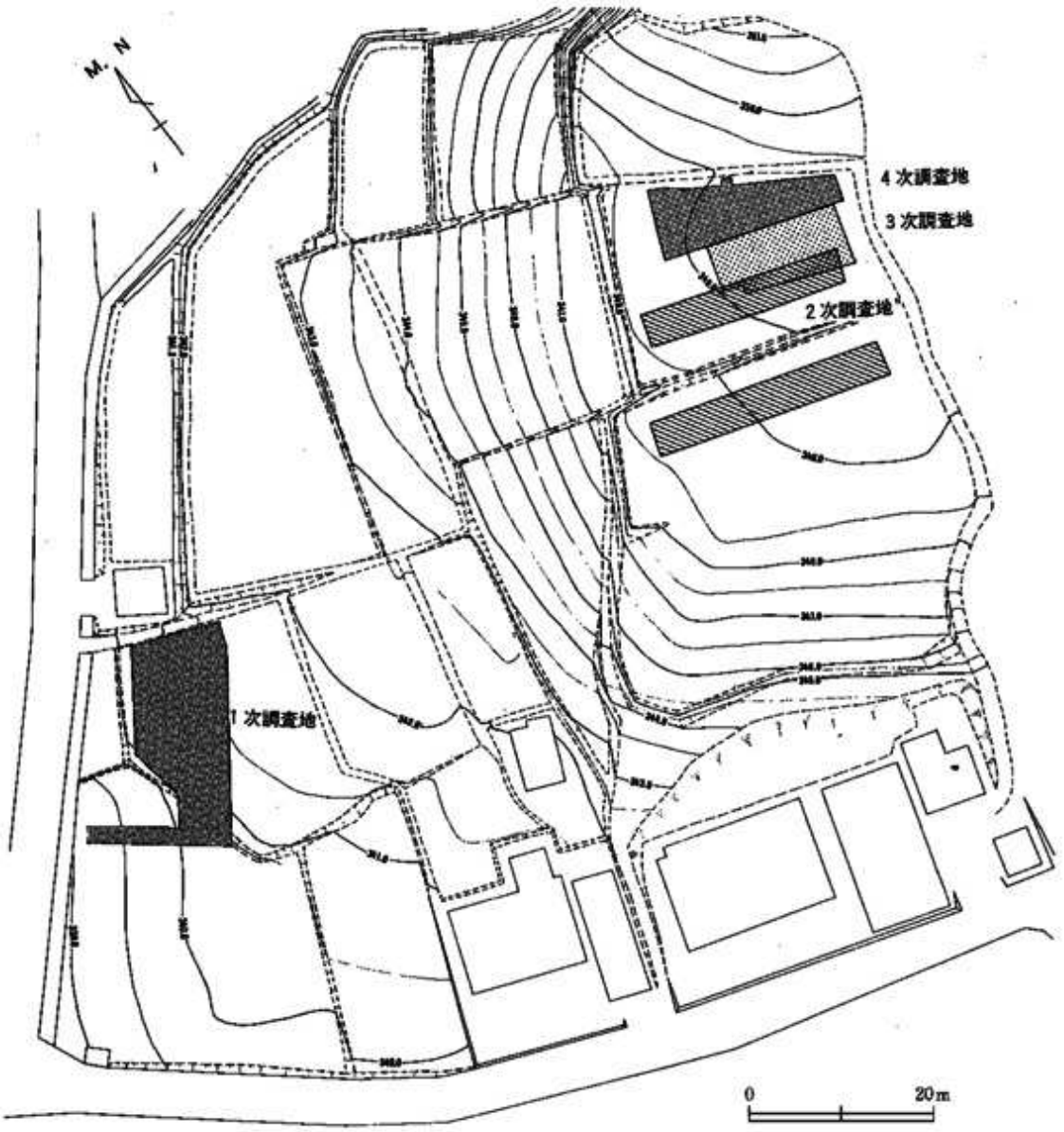
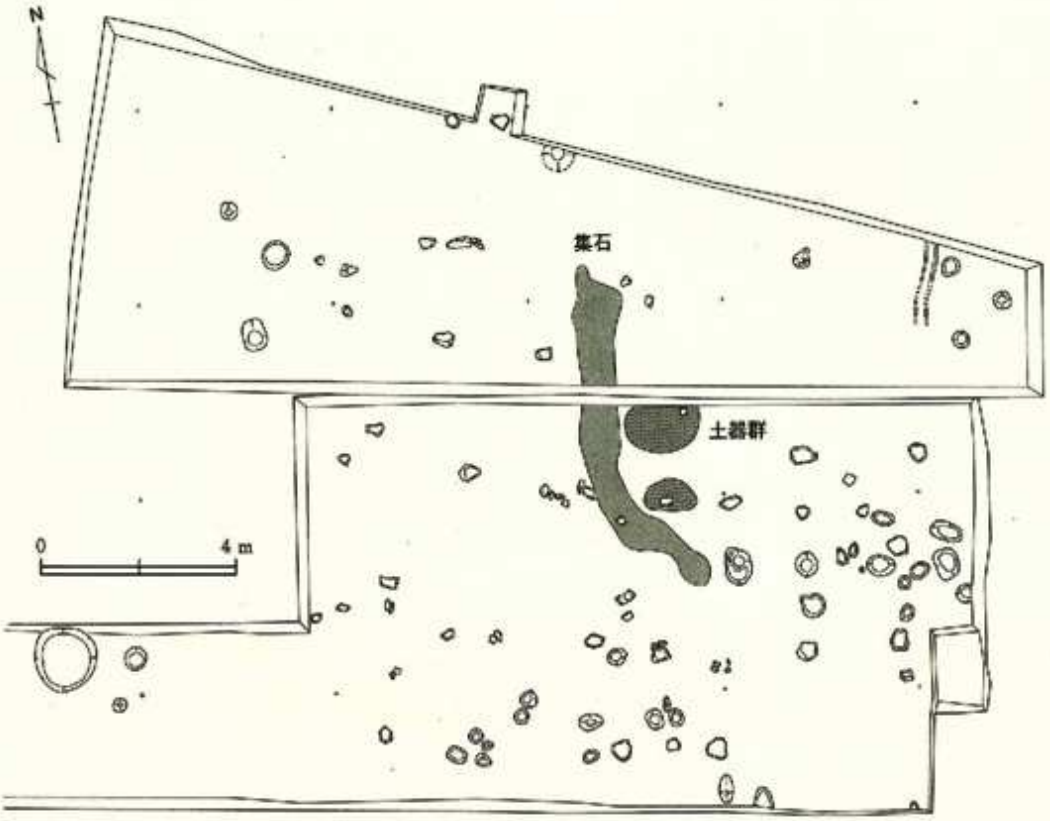
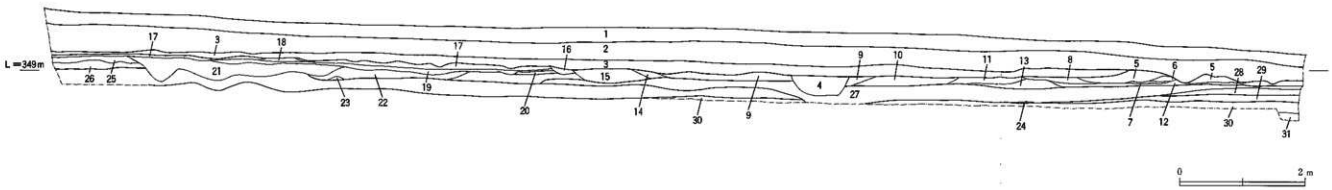


図26　下城・馬場遺跡調査位置図



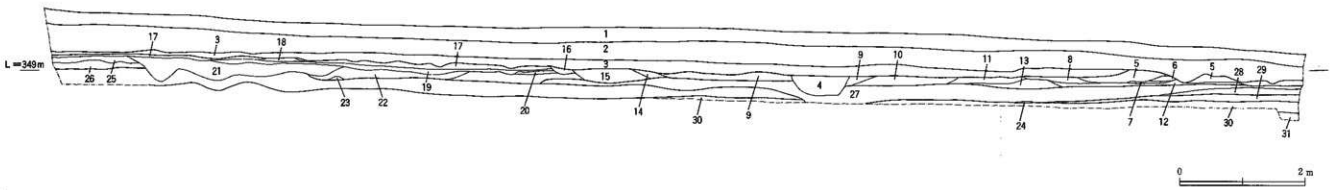
(メッシュは6尺5寸)

図27　下城・馬場遺跡第2遺構面平面図



1	耕作土		第1層	27	暗灰黄色土	〈2.5YR 4/2〉	第4層
2	にぶい黄橙色砂質土	〈10YR 6/3〉	第2層	28	褐色土	〈7.5YR 4/3〉	
3	暗褐色土	〈10YR 3/4〉	第3層(上層)	29	黒褐色土	〈10YR 3/2〉	第5層
4	褐色土	〈10YR 4/4〉	土坑	30	明褐色砂質土	〈7.5YR 5/6〉	第6層
5	褐色砂質土	〈7.5YR 4/4〉		31	褐色砂質土	〈7.5YR 4/6〉	
6	褐色土	〈7.5YR 4/4〉					
7	褐色粘質土	〈10YR 4/6〉					
8	褐色粘土	〈7.5YR 4/4〉					
9	明黄褐色土	〈10YR 6/6〉					
10	褐色土	〈10YR 4/6〉					
11	褐色砂質土	〈10YR 4/6〉					
12	黄褐色砂質土	〈10YR 5/6〉	地山土				
13	褐色土	〈10YR 4/4〉					
14	暗褐色土	〈10YR 3/3〉					
15	暗褐色土	〈10YR 3/3〉	集石				
16	にぶい黄褐色土	〈10YR 4/3〉	第3層(下層)				
17	黄褐色粘土	〈2.5YR 5/3〉					
18	黄褐色粘土(斑状)	〈2.5YR 5/3〉					
19	暗灰黄色砂質土	〈2.5Y 4/2〉	中世土器を多く含む				
20	暗灰黄色粘土	〈2.5Y 5/2〉					
21	暗灰黄色砂質土	〈2.5Y 4/2〉					
22	暗灰黄色土	〈2.5Y 4/2〉					
23	黄褐色粘質土	〈10YR 5/6〉					
24	黒褐色土	〈2.5Y 3/2〉	土器群				
25	にぶい黄褐色砂質土	〈10YR 4/3〉					
26	明褐色土	〈7.5YR 5/6〉	地山土				

図28　下城・馬場遺跡土層断面図



1	耕作土			第1層	27	暗灰黄色土	(2.5YR 4/2)
2	にぶい黄橙色砂質土	(10YR 6/3)		第2層	28	褐色土	(7.5YR 4/3)
3	暗褐色土	(10YR 3/4)		第3層(上層)	29	黒褐色土	(10YR 3/2)
4	褐色土	(10YR 4/4)		土坑	30	明褐色砂質土	(7.5YR 5/6)
5	褐色砂質土	(7.5YR 4/4)			31	褐色砂質土	(7.5YR 4/6)
6	褐色土	(7.5YR 4/4)					
7	褐色粘質土	(10YR 4/6)					
8	褐色粘土	(7.5YR 4/4)					
9	明黄褐色土	(10YR 6/6)					
10	褐色土	(10YR 4/6)					
11	褐色砂質土	(10YR 4/6)					
12	黄褐色砂質土	(10YR 5/6)	地山土				
13	褐色土	(10YR 4/4)					
14	暗褐色土	(10YR 3/3)					
15	暗褐色土	(10YR 3/3)	集石				
16	にぶい黄褐色土	(10YR 4/3)		第3層(下層)			
17	黄褐色粘土	(2.5YR 5/3)					
18	黄褐色粘土(漸移的)	(2.5YR 5/3)					
19	暗灰黄色砂質土	(2.5Y 4/2)	中世土器を多く含む				
20	暗灰黄色粘土	(2.5Y 5/2)					
21	暗灰黄色砂質土	(2.5Y 4/2)					
22	暗灰黄色土	(2.5Y 4/2)					
23	黄褐色粘質土	(10YR 5/6)					
24	黒褐色土	(2.5Y 3/2)	土器群				
25	にぶい黄褐色砂質土	(10YR 4/3)					
26	明褐色土	(7.5YR 5/6)	地山土				

第4層
第5層
第6層

図28　下城・馬場遺跡土層断面図

(3) 出　土　遺　物

遺物は第３～５層から多く出土しており、主なものとしては、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、青磁、陶器、磁器、瓦、石臼、銭貨、鉄釘、鉄刀子、鉄滓、壁土などが認められ、整理箱40箱に相当する。整理段階のため、詳細は明らかにできないが、中世土器の年代は、14世紀～16世紀のものである。このなかでも、第３層や第２遺構面から出土した16世紀中葉の土師皿が大半を占める。紙幅の都合上、詳細は省略するが、集石、第４層、第５層から出土した土師皿の一部を図示しておく（図29）。

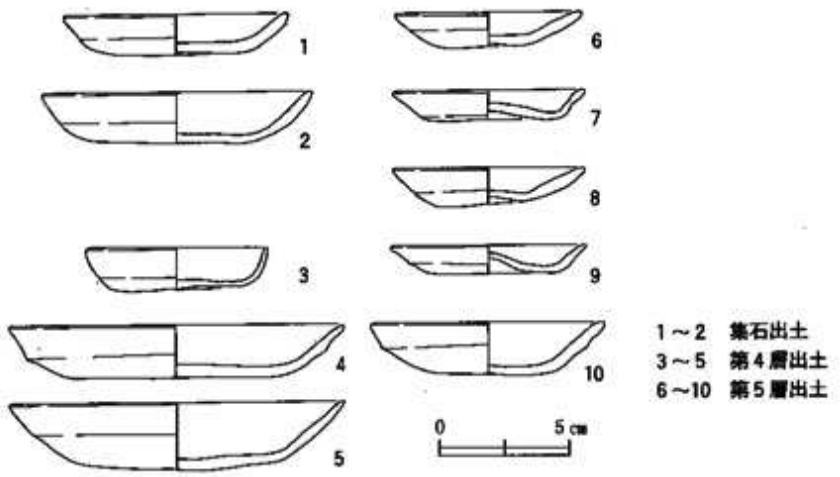


図29　下城・馬場遺跡出土遺物実測図

4　ま　と　め

下城・馬場遺跡は、以前から縄文時代から中世の遺物散布地として知られており、1984年の１次発掘調査では縄文土器、弥生土器、中世土器が出土し、弥生時代の流路、中世の井戸、土坑、ピット等も検出しており、小字名（下城、馬場）から沢城及び沢氏に関係した居館跡と考えている遺跡でもある。

遺跡最高所の平坦面には、２次～４次にわたる発掘調査によって少なくとも、３時期の遺構面が確認でき、第２・３遺構面の各所には、焼土・炭層が認められる。遺構の全体構成の詳細は明らかにできないものの、第２・３遺構面には、いずれも数棟の礎石建物が想定できる。これらの礎石はいずれも焼けており、火災によってそれぞれの建物が焼失したことが考えられる。出土土器から第２遺構面は16世紀中葉頃、第３遺構面は15世紀代と考えられ、沢氏の居館跡と考えられる下城・馬

場遺跡は、整地、火災、整地が繰り返されていることが明らかとなった。なお、第2遺構面の礎石建物等は、その時期から高山氏が沢城へ入城した頃の可能性も考えられる。

下城・馬場遺跡は、12世紀～16世紀にわたって、その機能を果たしており、中世城館跡を調査・研究する上において、重要な遺跡のひとつといえよう。

5 抄　　録

遺跡名	下城（しもんじょ）・馬場（ばば）遺跡（奈良県遺跡地図番号15-D-90、榛原町遺跡地図番号2-546）
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字沢1292番地（小字名：下城）
遺跡立地	標高約339m～351mの尾根斜面・谷部分
調査地	南北：約120m、東西：約100m
種別	縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺物散布地、中世の居館跡
調査主体	榛原町教育委員会
調査担当者	榛原町教育委員会　生涯学習課　技師　柳澤一宏
調査原因	個人による土地改良工事（事業主体：田中昇）
現地調査期間	1997年（平成9年）11月28日～1998年（平成10年）3月31日
調査面積	105㎡
検出遺構	礎石建物遺構、土坑、溝、ピット
検出遺物	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、青磁、陶器、磁器、瓦、石臼、銭貨、鉄釘、鉄刀子、鉄滓、壁土等
	（整理箱　40箱）
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

図　　版

航空写真（1981年撮影）

5次調査

7・8次調査

図版三　沢遺跡（7次調査）

空中写真（垂直）

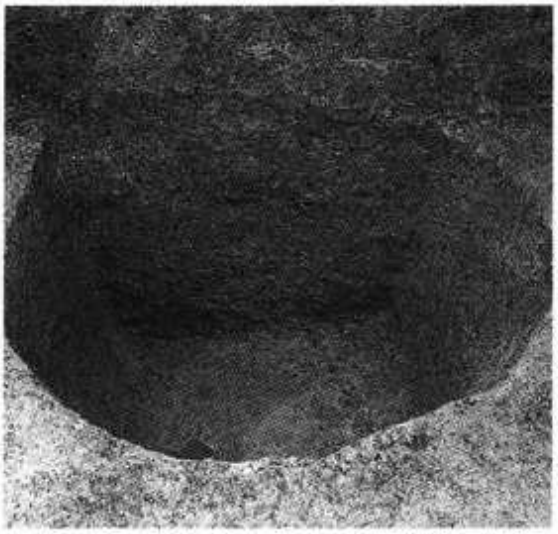
空中写真（南西から）

図版四　沢遺跡（7次調査）

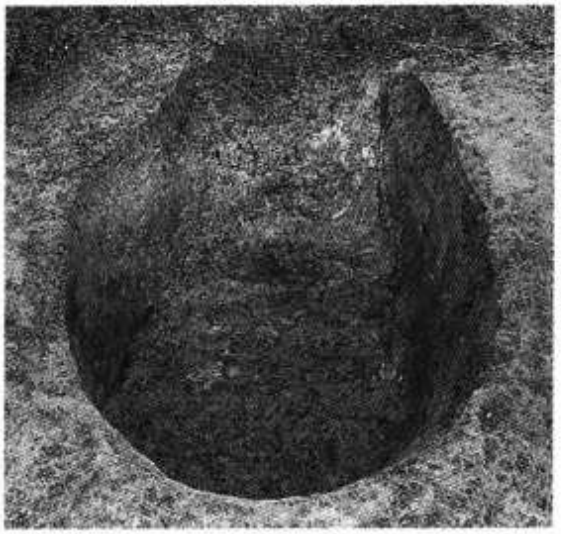
調査地（東から）

調査地（西から）

図版五　沢遺跡（7次調査）



SK－01



SK－02

SK－03

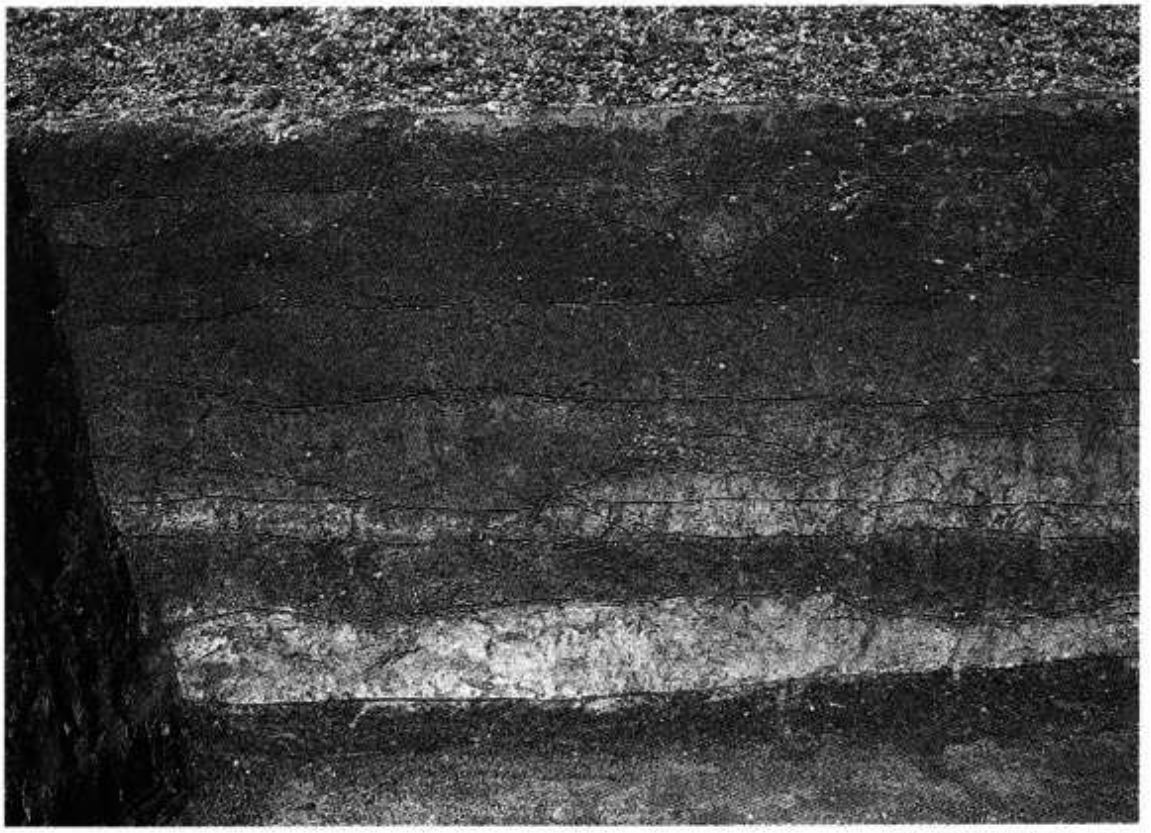
SK－04

SK－06

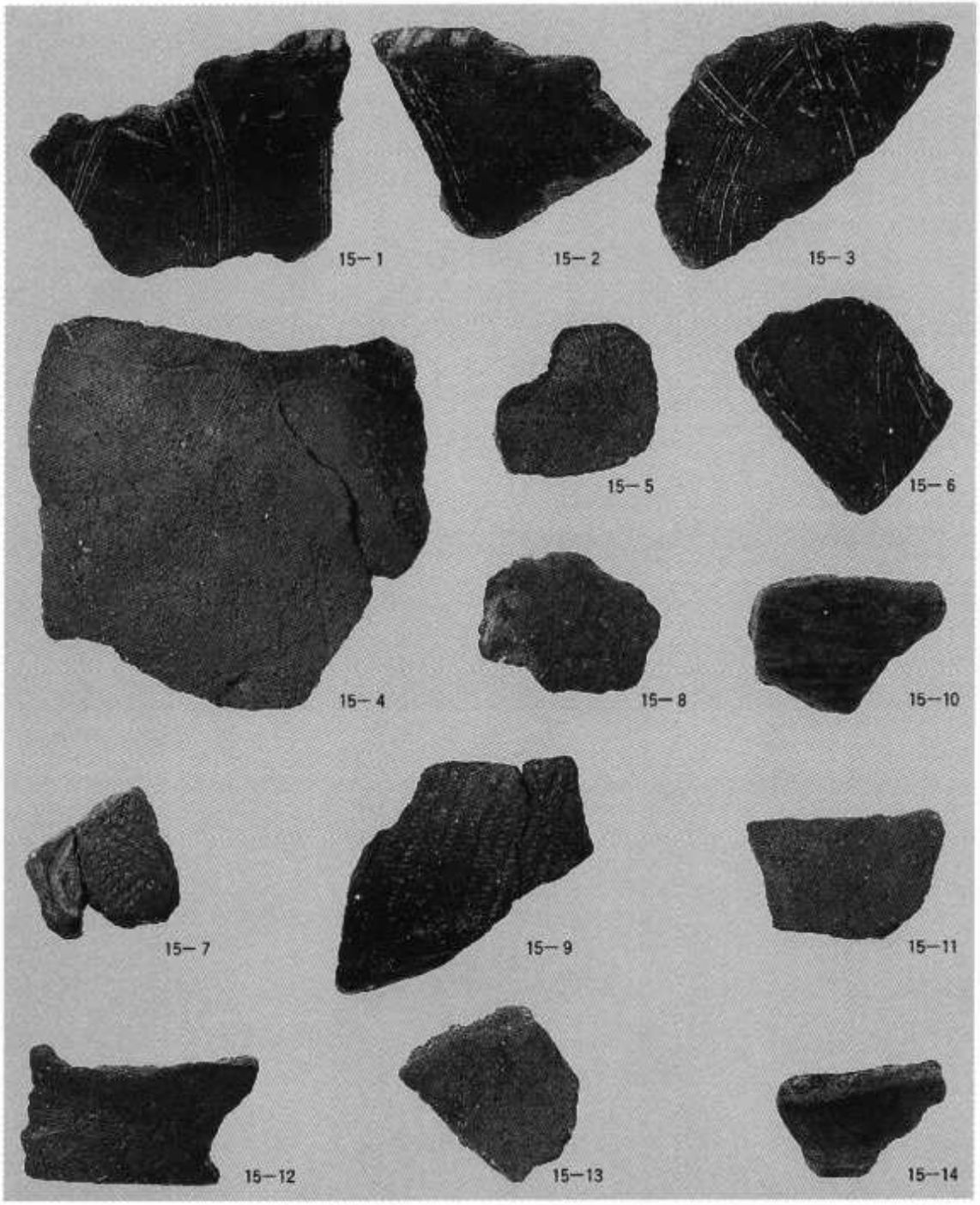
SK－07

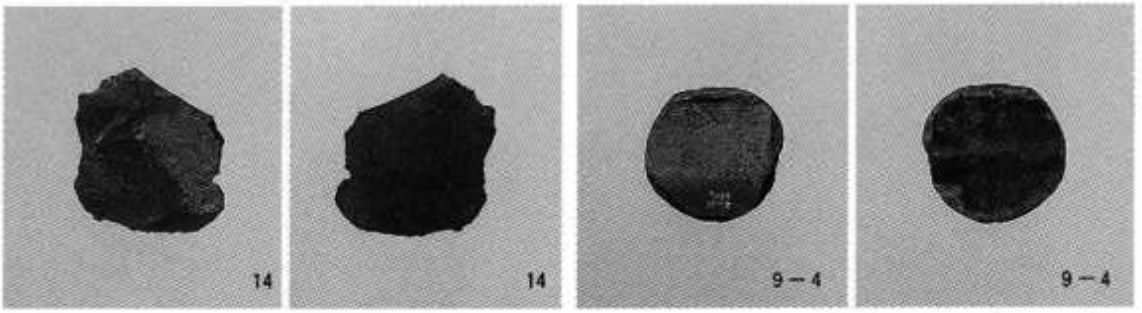
図版六　沢遺跡（7次調査）

土層断面（南西から）



土層断面（南から）





出土遺物（数字は挿図番号と一致）

図版八　沢遺跡（8次調査）

第1遺構面（東から）

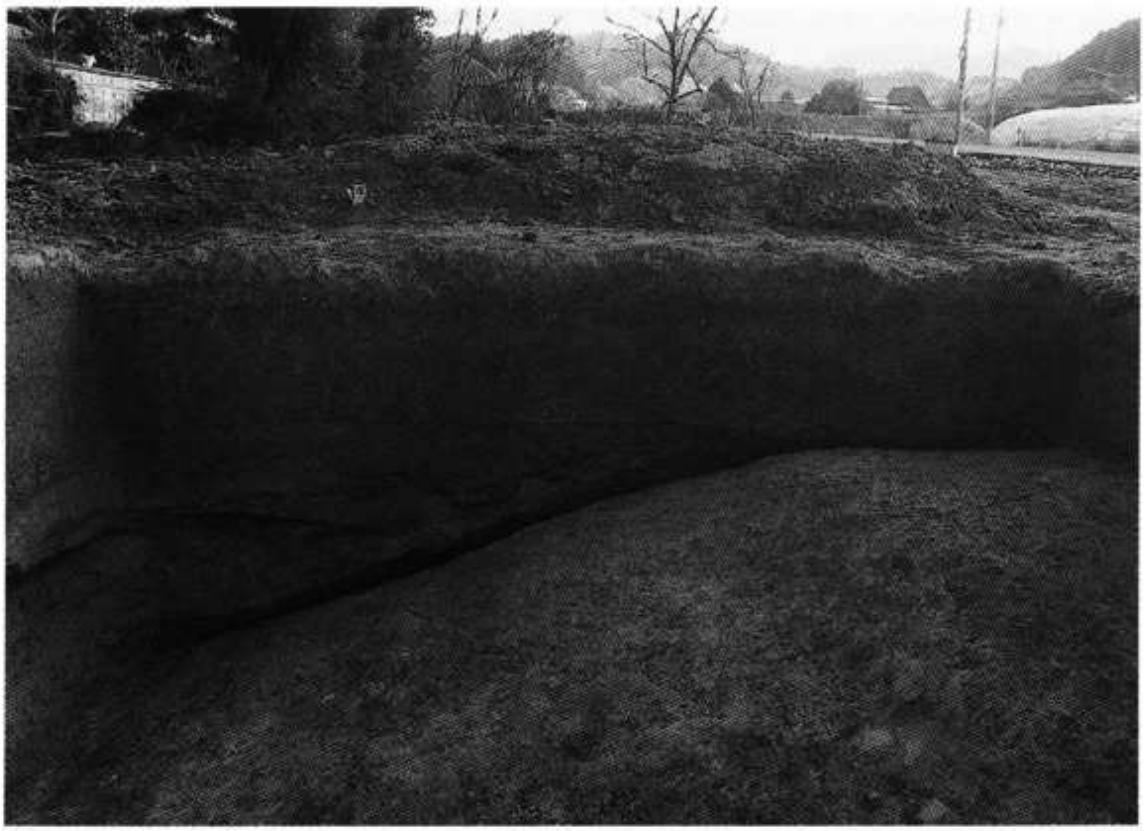
第1遺構面（西から）

第2遺構面（東から）

第2遺構面（西から）

図版一〇　沢遺跡（8次調査）

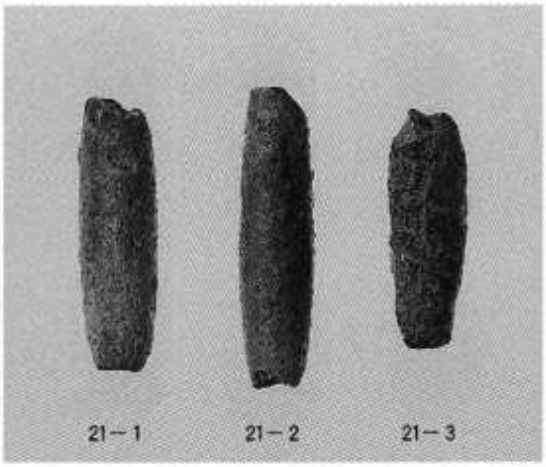
第2遺構面（北から）

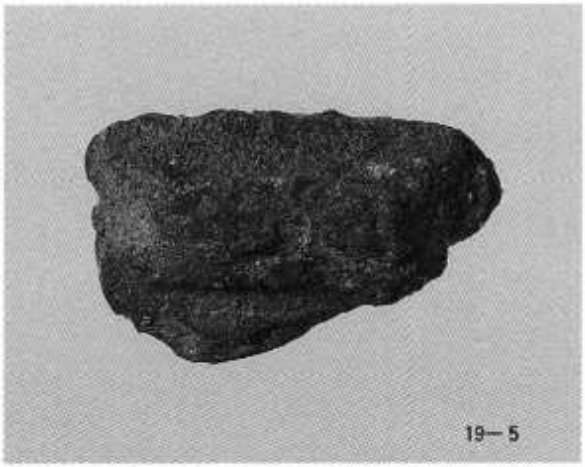


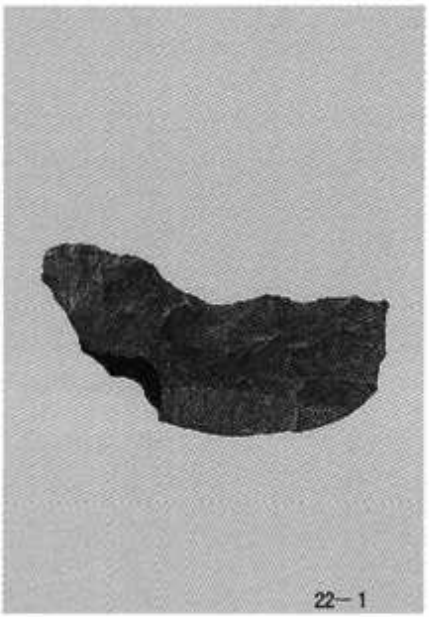
土層断面（西から）

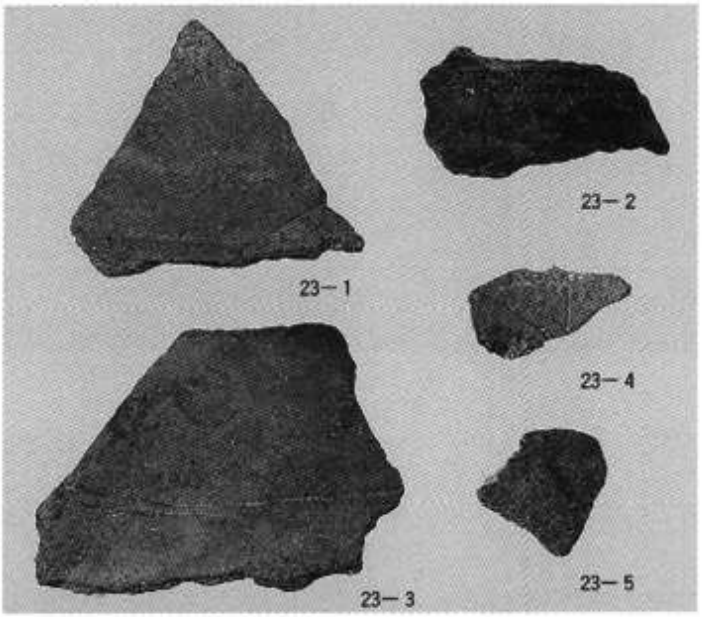
土層断面（南東から）

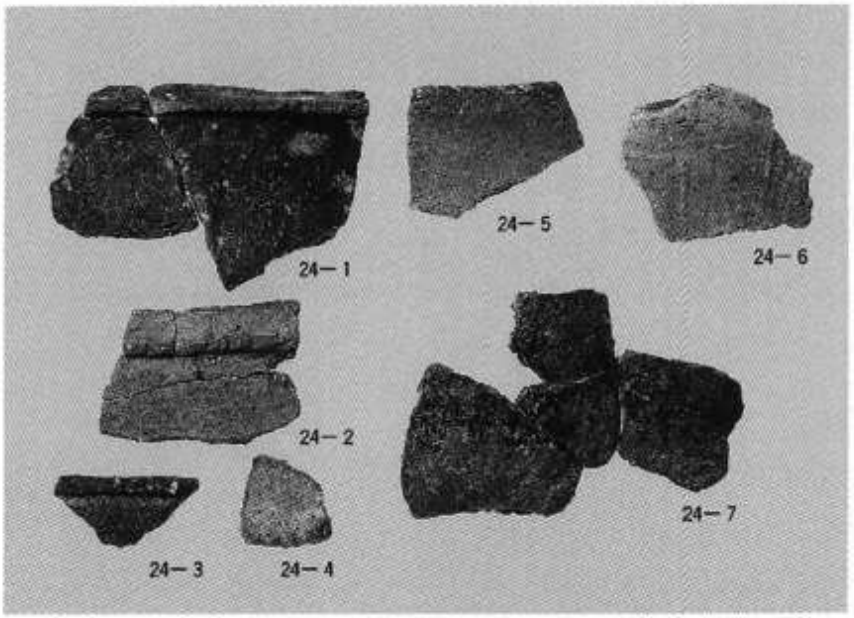
土層断面（南から）



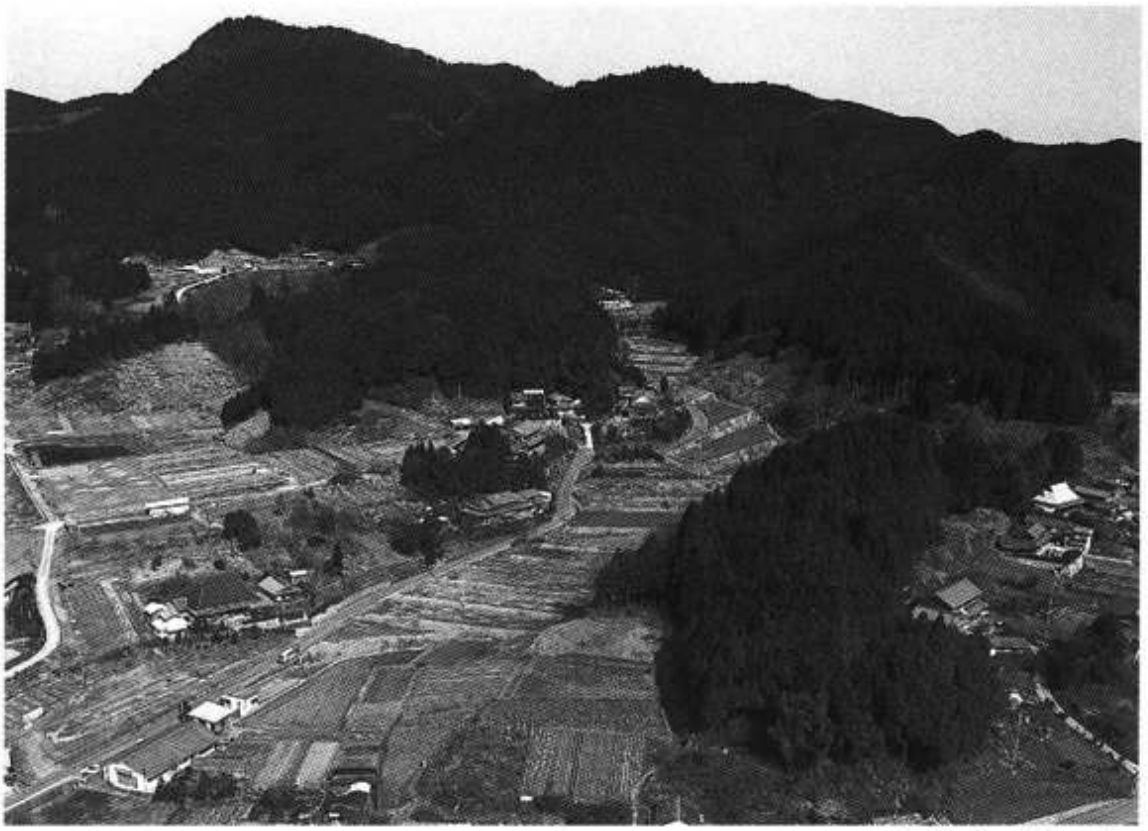








出土遺物（数字は挿図番号と一致）

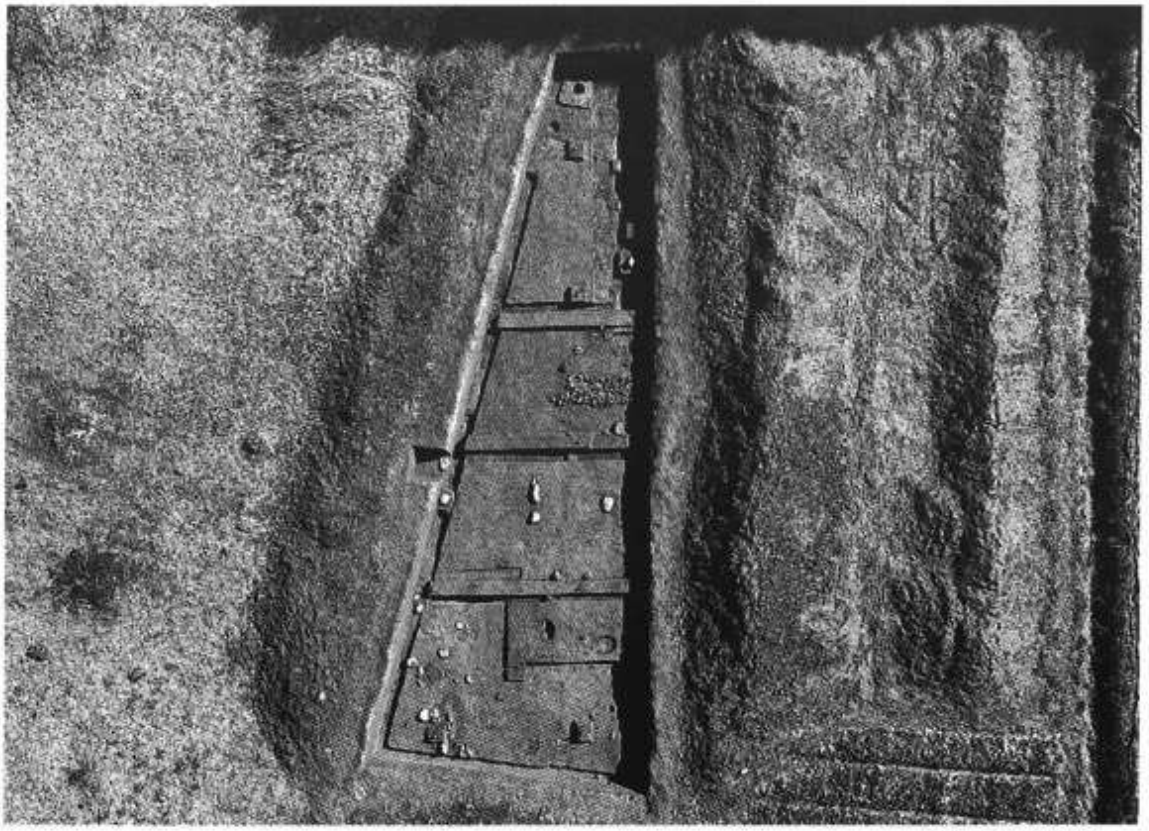


空中写真（南から）

空中写真（南から）

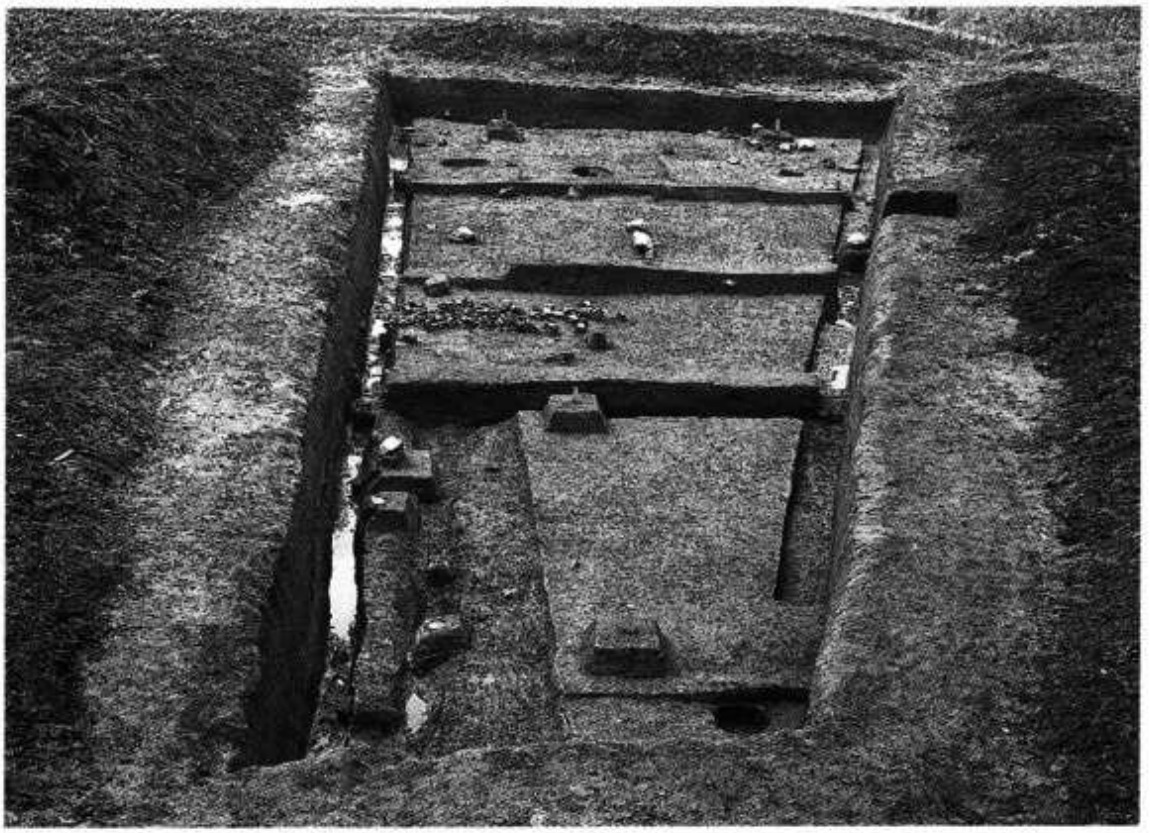
空中写真（垂直）

空中写真（西から）

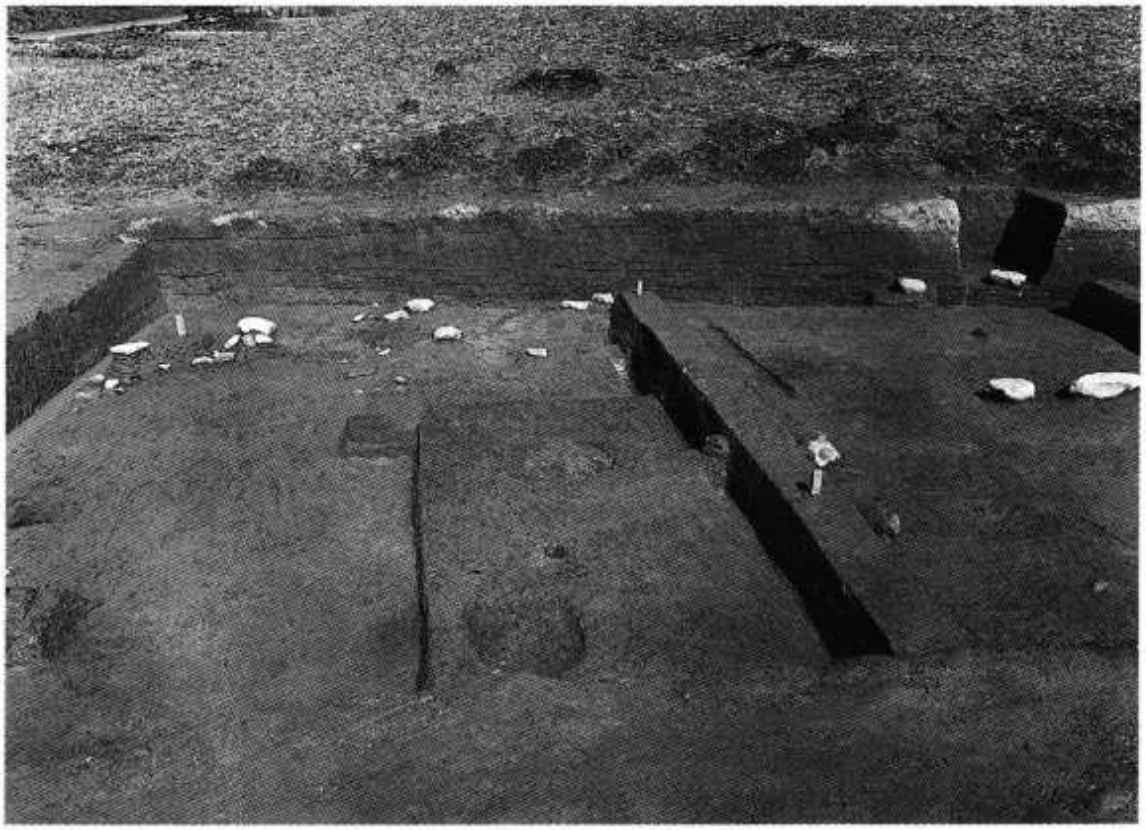


空中写真（垂直）

第２遺構面（東から）



第２・３遺構面（東から）



第２遺構面（南から）

第２遺構面（南から）

第２遺構面・集石（南から）

第２遺構面・集石（北から）

第２遺構面・土器群（南から）

第２遺構面・土器群（北から）

第３遺構面（南から）

第３遺構面（東から）

第３遺構面（東から）

第３遺構面（東から）

第３遺構面（南から）

土地断層（南から）

報告書抄録

ふりがな	はいばらちょうないいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	榛原町内遺跡発掘調査概要報告書　1997年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	榛原町文化財調査概要
シリーズ番号	２０
編著者名	柳澤一宏、横澤　慈
編集機関	榛原町教育委員会
所在地	〒633-0292 奈良県宇陀郡榛原町大字萩原164番地　TEL 0745-82-1301(代)
発行年月日	西暦　1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
沢遺跡 （７次）	奈良県宇陀郡榛原町 大字沢1417番地	29383		34度 29分 17秒	135度 58分 02秒	1997.11.18 ～ 1998.03.10	68	個人住宅 建設工事
沢遺跡 （８次）	奈良県宇陀郡榛原町 大字沢980番地	29383		34度 29分 17秒	135度 58分 02秒	1997.12.09 ～ 1998.03.10	43	個人農地 改良工事
下城・馬場 遺跡	奈良県宇陀郡榛原町 大字沢1292番地	29383		34度 29分 26秒	135度 58分 17秒	1997.11.28 ～ 1998.03.31	105	個人農地 改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沢遺跡 （７次）	遺物散布地 集落跡	縄文～中世 縄文～中世	土坑、溝	縄文土器、サヌカイト剥片、土師器、陶器、磁器、鉄刀子、鉄釘、小柄等	広範にわたる縄文時代後期～晩期の遺物包含層の存在が予想される。
沢遺跡 （８次）	遺物散布地 集落跡	縄文～中世 縄文～弥生	溝、自然地形	縄文土器、石鏃、サヌカイト剥片、弥生土器、須恵器、円筒埴輪、瓦器、土師器、土錘、陶器、磁器、鉄鉾、鉄釘等	
下城・馬場 遺跡	遺物散布地 城館跡	縄文～古墳、中世 中世	礎石建物跡、土坑、溝、ピット、集石等	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、石臼、銭貨、鉄刀子、鉄釘、鉄滓、壁土等	15・16世紀代の礎石建物遺構が認められる。

橿原町内遺跡発掘調査概要報告書 1997年度

橿原町文化財調査概要 20

1999年 3月31日 発行

編集
発行 橿原町教育委員会
奈良県宇陀郡橿原町萩原164番地

印刷 株式会社 中西文山堂
奈良県橿原市今井町3丁目31－1